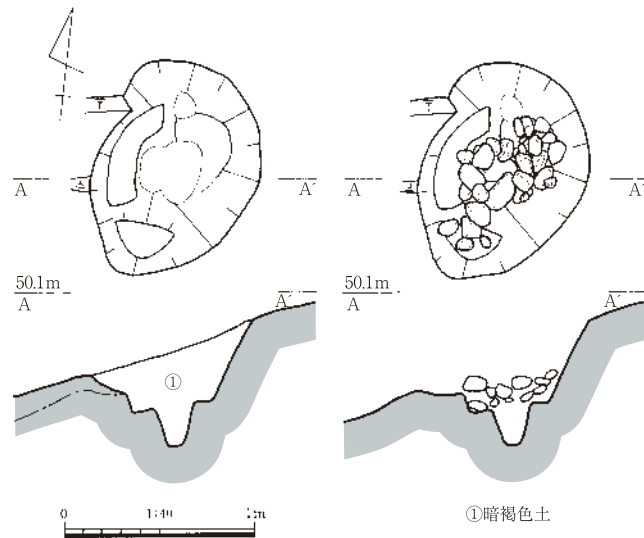


拳大から人頭大の山石が、長軸 1.17 m、短軸 0.82 m、深さ 0.47 m の土坑の中に落ち込んでいる。この土坑は平面楕円形を呈し、地山を掘り込んで作られている。石材には重なった状況が認められ、本来は数段に亘って積まれたものと考えられる。中央部は木根によって攪乱されている。

埋土は、暗褐色土単層である。

出土遺物はなく、時期、性格とも不明である。(牧本)



第241図 集石遺構 4

第3節 西斜面部の調査

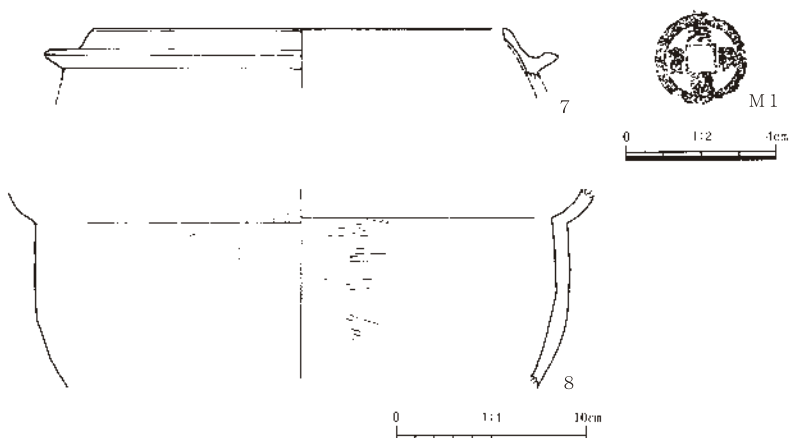
(1) 段状遺構

段状遺構 3・4、土坑 12 (第242・243図、P L.60・70)

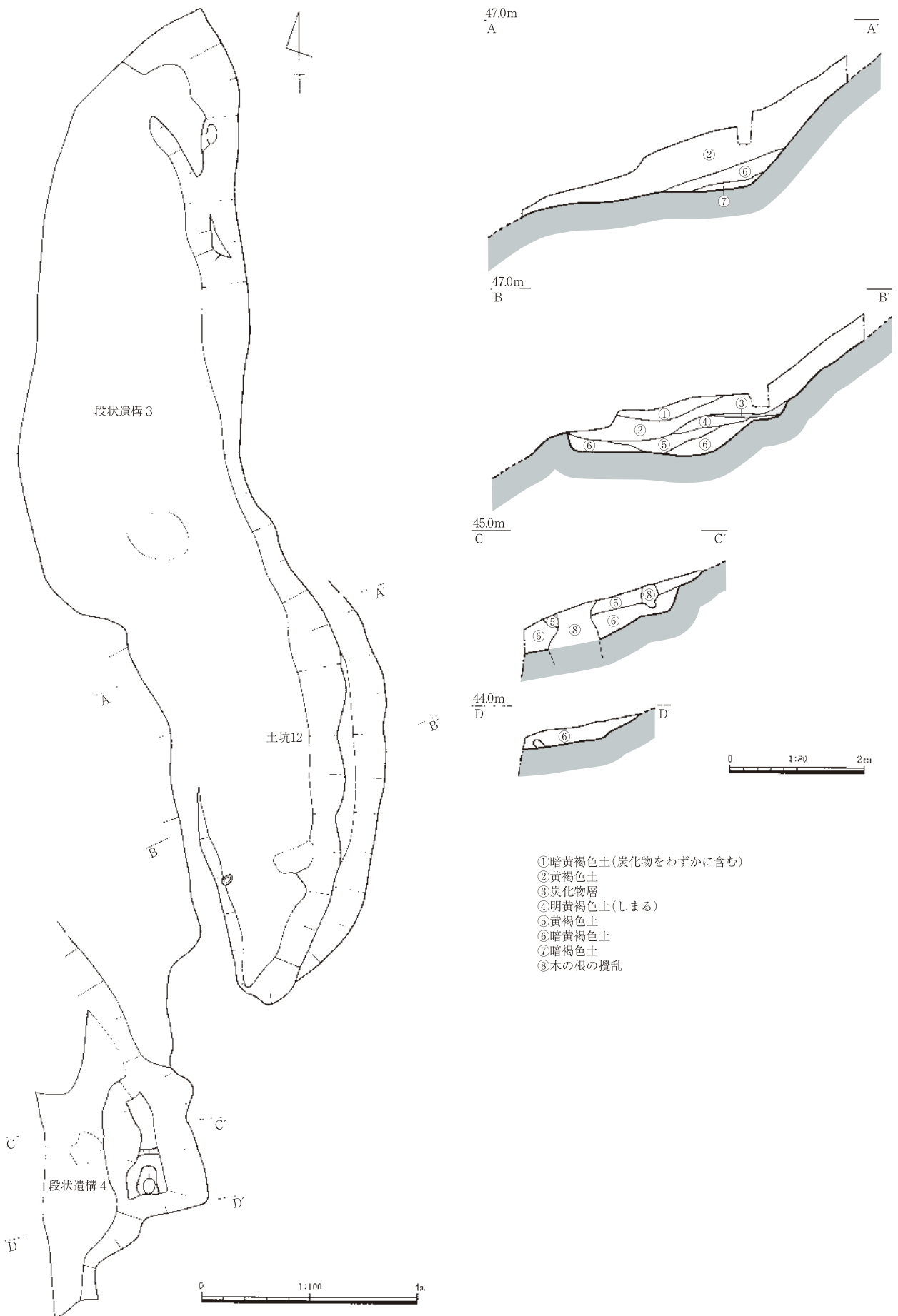
調査区西側、E 7 から G 7 グリッドにかけての標高 43 ~ 45.5 m の丘陵斜面部に立地する。調査前から平坦面の存在が認められた場所である。

段状遺構 3 は、幅 2.5 ~ 3.8 m、長さ 17.5 m 以上を測る。丘陵斜面部を L 字状に掘削して平坦面を作っている。北側は、近代の墓地 (捨て墓) のために大きく掘削されており、遺存していない。西側は流失しており、正確な平坦面の幅は不明である。南側は、後世の製炭土坑 12 に掘り込まれている。

埋土は、3 から 6 層に分層できたが純粋な埋土だけではない。埋土中で製炭土坑 12 が掘り込まれているが、明確な範囲は掘り飛ばしてしまい規模等は不明である。第 4 層上面が硬化しており底面をなしていたものと思われる。炭化材が幅 1.7 m、長さ 3.7 m に亘って出土している。



第242図 段状遺構 3・4 出土遺物



第243図 段状遺構 3・4、土坑12

炭焼きの時期は不明であるが、丘陵上の炭焼き土坑と同時期のものと考えられる。

出土遺物には、埋土下層で土師器羽釜7、元祐通寶M1がある。

段状遺構4は、段状遺構3の南西側にあり、一段低い斜面部に位置する。土壘盛土を除去した後に検出されたものである。平坦面は不整形で、一部二段状を呈す。木の根による攪乱が著しい。

埋土は2層に分層できた。土壘盛土である砂質の層とは異なり、ローム層由来の黄褐色土系の土層で、自然堆積したのと考えられる。

出土遺物には、底面上での土師器鍋8がある。

段状遺構3・4とも、出土遺物から八峠中世 期、13～14世紀ごろのものと考えられ、土壘築造以前のものである。性格は不明である。(牧本)

第4節 東斜面部・丘陵裾部の調査

(1) 盛土遺構

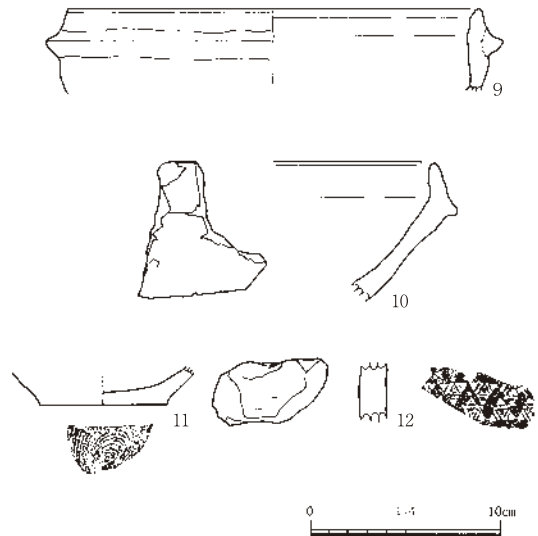
盛土遺構1(第244～247図、P.L.61・62・70)

調査区東側のC3グリッドの斜面部にあり、標高39.0～41.7mからにかけて立地している。調査前は、見かけの幅約7m、長さ約9m、高さ約3mを測る天狗の鼻状に突出する地形があり、これを古墳状の隆起とみなして調査を行った。

この隆起はクロボクとロームの細かな互層によって造成され、古墳の版築を思わせるが、土の締まり具合からは、突き固めた様子は認められない。造成土の堆積は水平ではなく、もとの地形の傾斜と同様に、南西から北東に向かって傾斜している。もとの地形の高さを除く、造成に伴う隆起の高さは2mで、標高41m付近から、盛土を水平にしようとした様子がみられる。山裾側の造成は見かけよりも遠くまで及んでおり、門前上屋敷遺跡の造成土につながっていく。隆起の北西側から北東側にかけては、段状遺構1の造成に伴って手が加えられており、また、隆起の南東側は石組み遺構などの立地する平地部分の形成

に伴って、およそ16世紀ごろに切り崩しが行われたと考えられる。

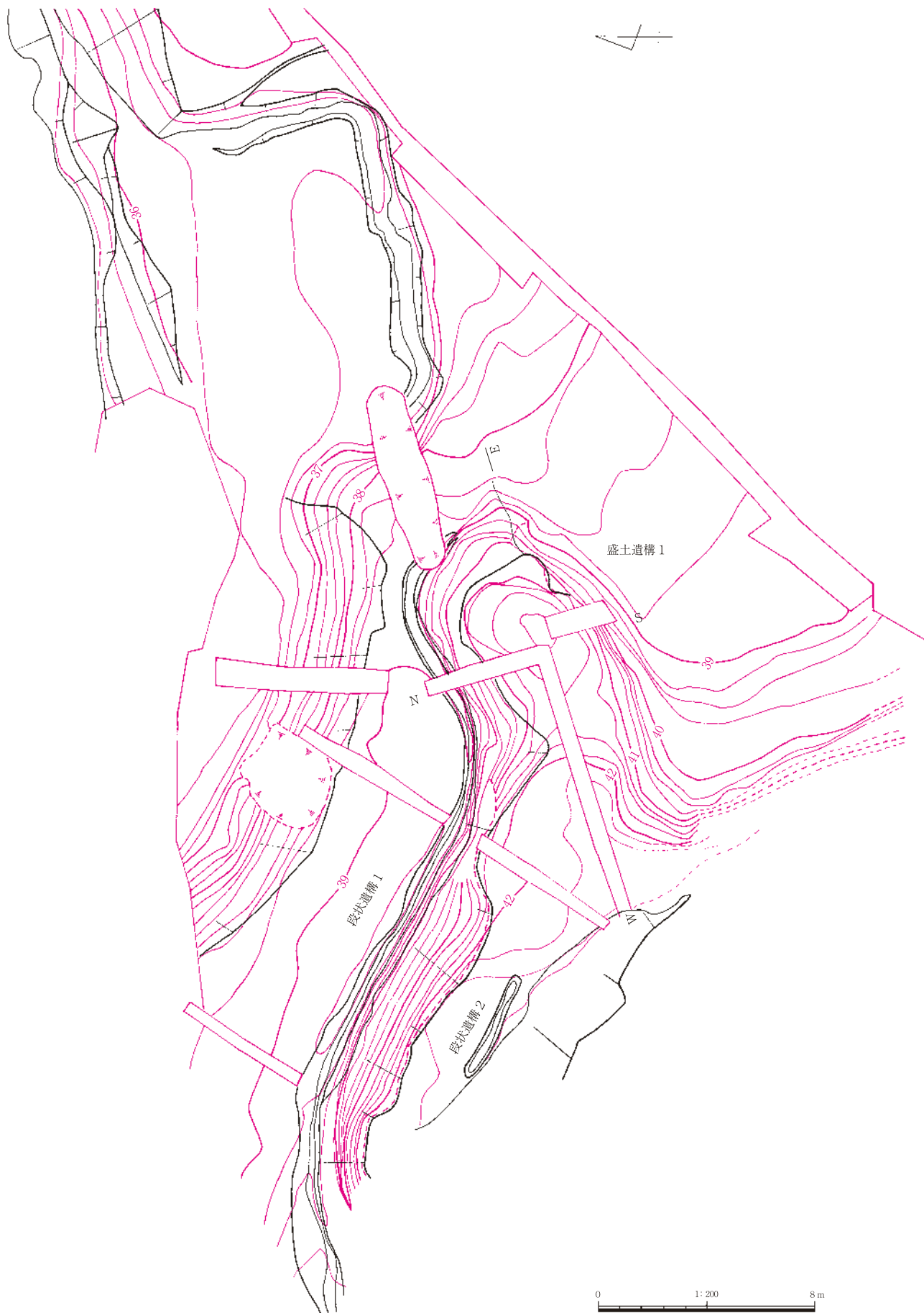
出土遺物には、図化したものに瓦質土器羽



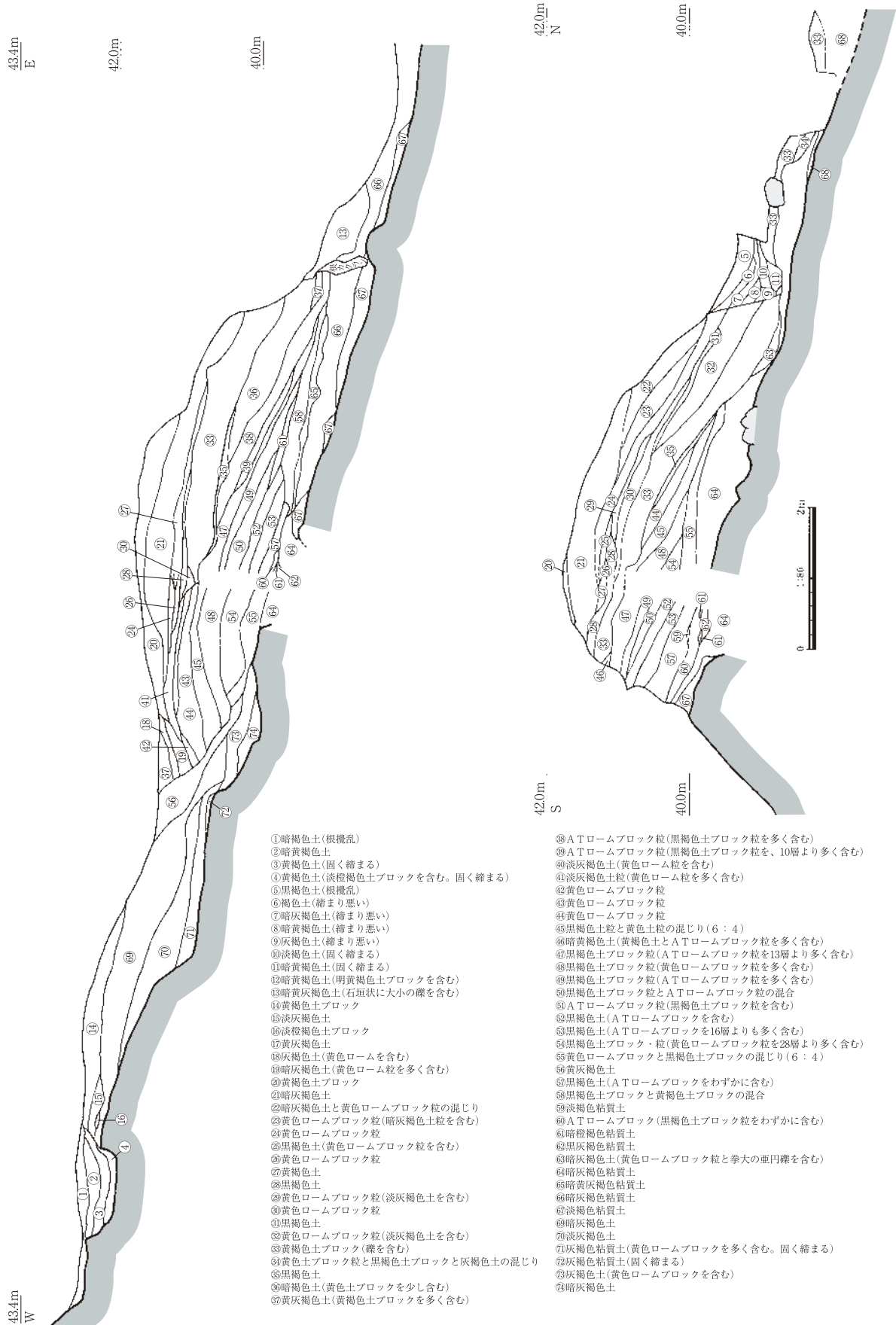
第244図 盛土遺構1出土遺物



第245図 盛土遺構1下層出土遺物



第246図 盛土遺構 1



第247図 盛土遺構1土層断面

釜9、備前焼播鉢10、土師器坏11、火鉢12がある。これらはおよそ16世紀ごろのものと考えられる。いずれも表土付近の出土であり、必ずしも当遺構に伴うものとはいえない。

時期を推定するものとして、当遺構の下層で後述する鉄鍋を埋納した土坑10がある。土坑10は14世紀ごろのものと考えられ、この時期以降に築造されていることは確かである。また、当遺構旧表に当たる遺物包含層からは、常滑焼13、鉄滓M2が出土しており正確な判断はできないが、14世紀ごろのものと考えられる。

この遺構が作られた目的については明らかではないが、地鎮遺構と考えられる土坑が伴うことを考えると、かなりシンボリック的な性格が考えられよう。(家塚・牧本)

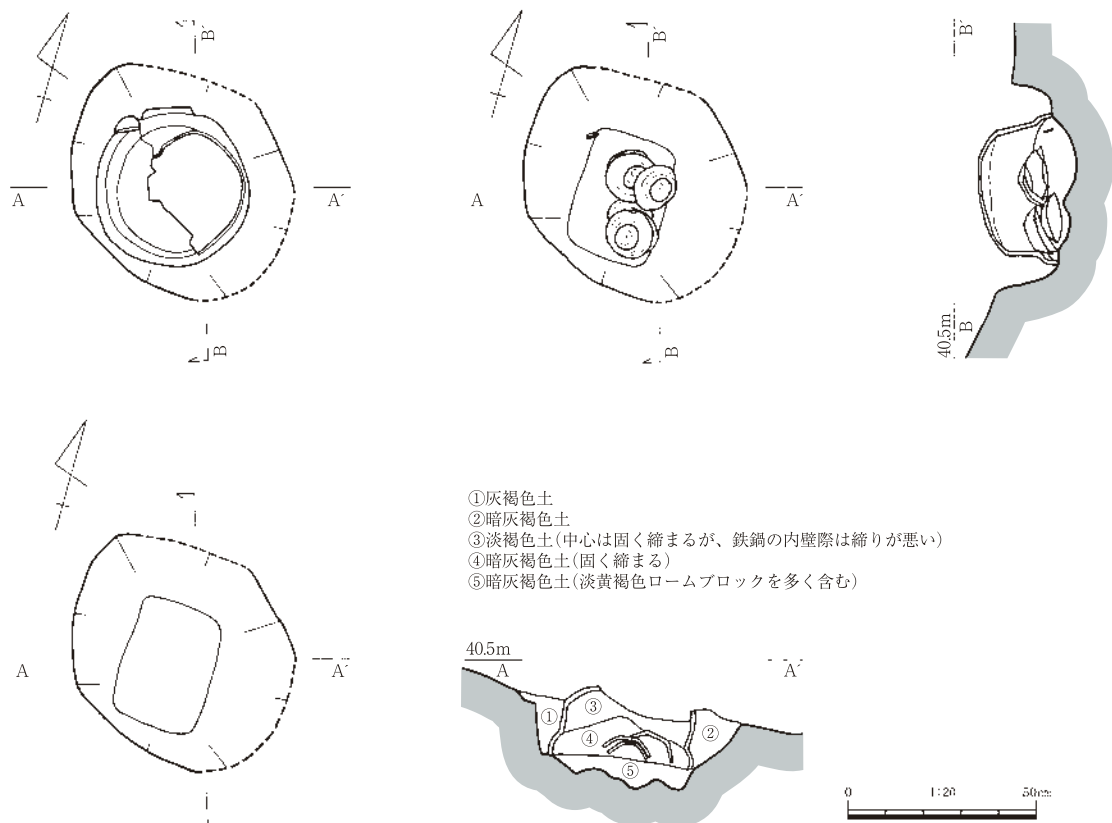
(2) 土坑

土坑10(第248・249図、P.L.62・63・71)

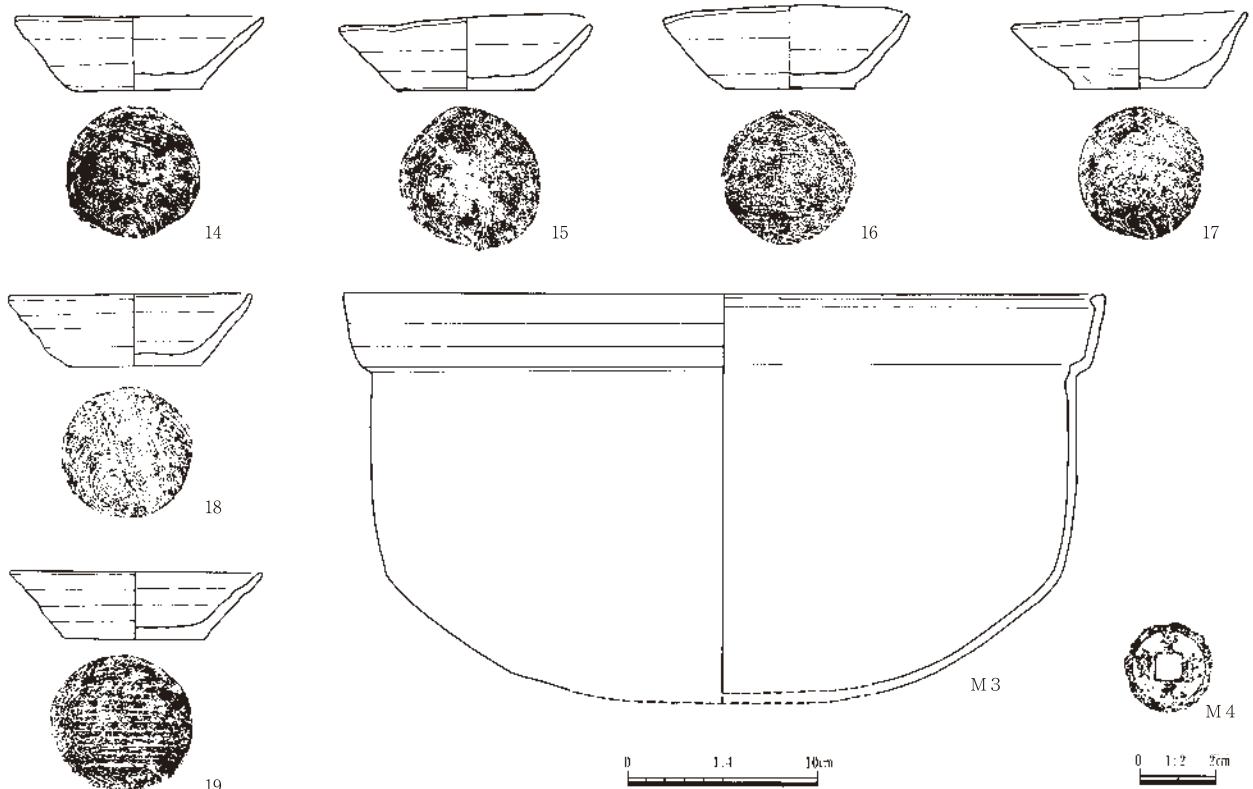
標高約40.3mの調査区東側斜面部C3グリッドにあり、盛土遺構1の盛土を除去し、旧表土面を検出しているときに、鉄鍋の破片が出土したことで存在を確認した。南東側約1mには段状遺構6がある。

土坑は旧表土上面から掘りこまれ、底面でローム層に達する。掘形は直径50cmの円形に復元され、検出面からの深さは25cm、底面は32cm×22cmの南北に長い長方形を呈している。この底面はいびつであったためか、くぼみを埋めて均している。

土坑の中に鉄鍋M3が伏せた状態で置かれ、その内側に6点の坏と1点の銅銭が入っていた。鉄鍋は口径40cm、高さ20cmで、口縁を下に向けていたが、土坑の底面よりも鍋の径が大きいために、土坑壁面に口縁を掛け、すこし傾いた状態であった。鍋底は検出時には破損しており、鍋内部の土は



第248図 土坑10



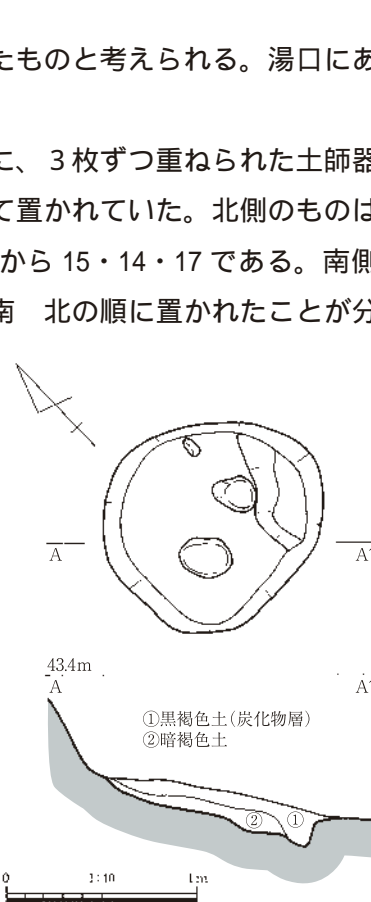
第249図 土坑10出土遺物

破面から少しずつ流入して堆積したものと考えられる。湯口にあたる部分は認められない。

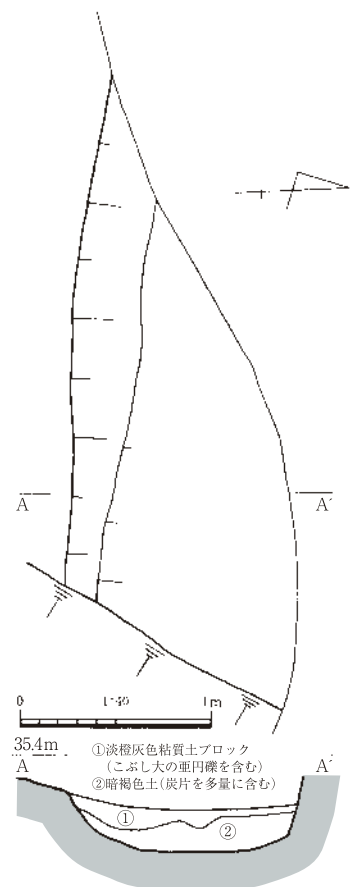
伏せられた鉄鍋内部の底面中央に、3枚ずつ重ねられた土師器坏が2組、南北に隣り合わせに伏せて置かれていた。北側のものは上から18・16・19、南側のものは上から15・14・17である。南側の坏に北側の坏が重なることから、南北の順に置かれたことが分かる。銅銭は土坑底面の北西隅に、坏の置かれた面とほぼ同じ高さで、表面を内側にして、内側に少し傾きつつも立った状態で出土している。

土坑埋土は、旧表土と同質である。鉄鍋の出土状況から、埋め戻されたものと推測する。

出土遺物は、鉄鍋M3、土師器坏14～19、聖宋元寶M4である。これらの遺物は、八峠編年中世期、13世紀～14世紀ごろのものと考えられ、出土位



第250図 土坑6



第251図 土坑11

置及び形態から盛土遺構1に伴う地鎮遺構と考える。(家塚)

土坑6 (第250図、P L.64)

調査区東側のE4グリッドにあり、標高42.6～43.3mの丘陵斜面部に立地する。下層には段状遺構2があるが、伴うものではない。

平面不整形円形を呈し、長軸1.2m、短軸1.08m、深さ0.14mを測る。底面は傾斜しており、東側は段状となる。

埋土は、2層に分層できた。第1層は、炭化物を多量に含んでいる。埋土中で地山自然礫が3個出土している。

出土遺物はなく、時期、性格とも不明であるが、周辺にある製炭土坑の可能性はある。(牧本)

土坑11 (第251図、P L.64)

調査区北側のB4グリッドにあり、標高約38.2mの東側斜面部に立地する。段状遺構1の盛土直下で検出した。

北東側は検出作業の過程で消滅し、南西側は調査区外に延びるため、全容は明らかでないが、幅約1mの帯状の

掘り込みが地面の傾きに対して直交する向きに延びていたと考えられる。検出面からの深さは15cm、検出した全長は2.5mで、断面は緩い船底形を呈する。

埋土は2層に分かれ、下層は炭片を多量に含み、上層はロームブロックと亜円礫で構成される。炭焼きに使われ、その後埋め戻されたものと推測する。

出土遺物には、須恵器片があるが図化できなかった。段状遺構1盛土下層で検出されたことから、16世紀以前のものと考えられる。(家塚)

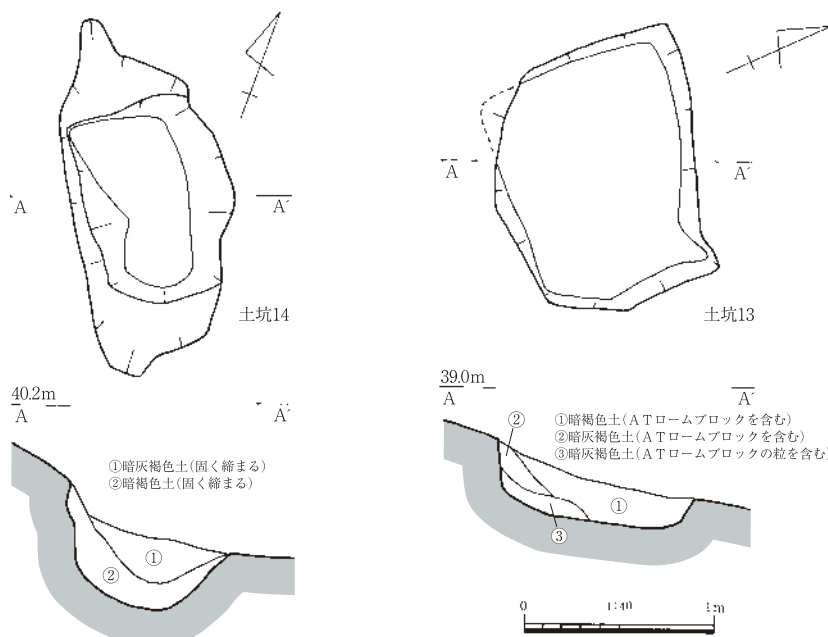
土坑13 (第252図、P L.64)

調査区東側のC3グリッドにあり、標高約38.2～38.7mの北東向きの斜面に立地する。

ローム層の上面で検出した。平面は不整形な五角形で、長軸1.4m、短軸1m、深さ45cmを測り、底面の形状は平坦である。

埋土はローム上面に堆積した、盛土遺構1形成前の旧表土に類似する。

出土遺物はなく、正確な時期は不明であるが、盛土遺構1(13～14世紀)以前と考えられる。性格、用途は明らかではない。(家塚)



第252図 土坑13・14

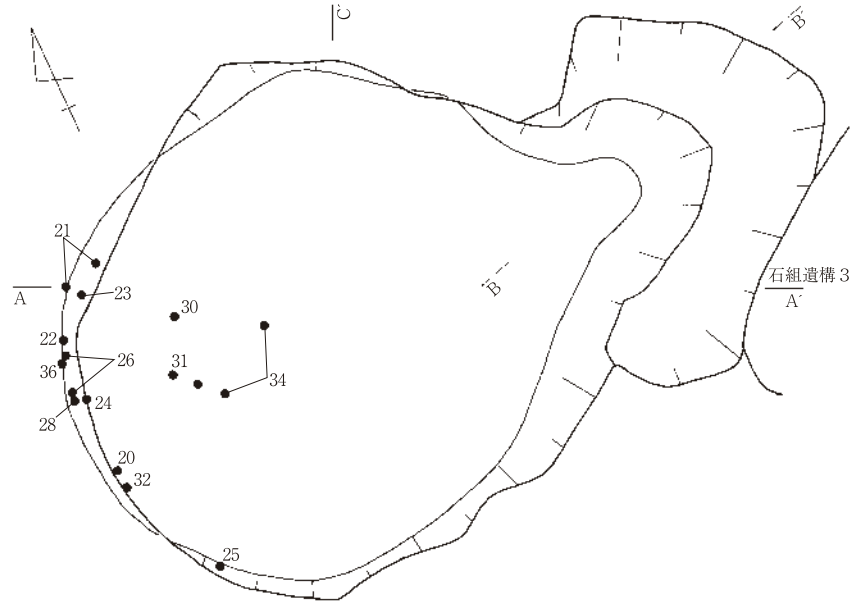
土坑14 (第252図、P L.64)

調査区東側のC3グリッドにあり、標高39.3～39.6mの北東側に傾斜する斜面部に立地する。盛土遺構1の層序確認のために設定したサブトレンチによって存在を確認した。

掘り込み面は盛土遺構1の下の旧表土面よりも下になる。平面は不整形な長円形を呈し、長軸1.6m、短軸0.85m、深さ30cmを測る。

埋土は2層に分層できた。いずれも固く締るものである。

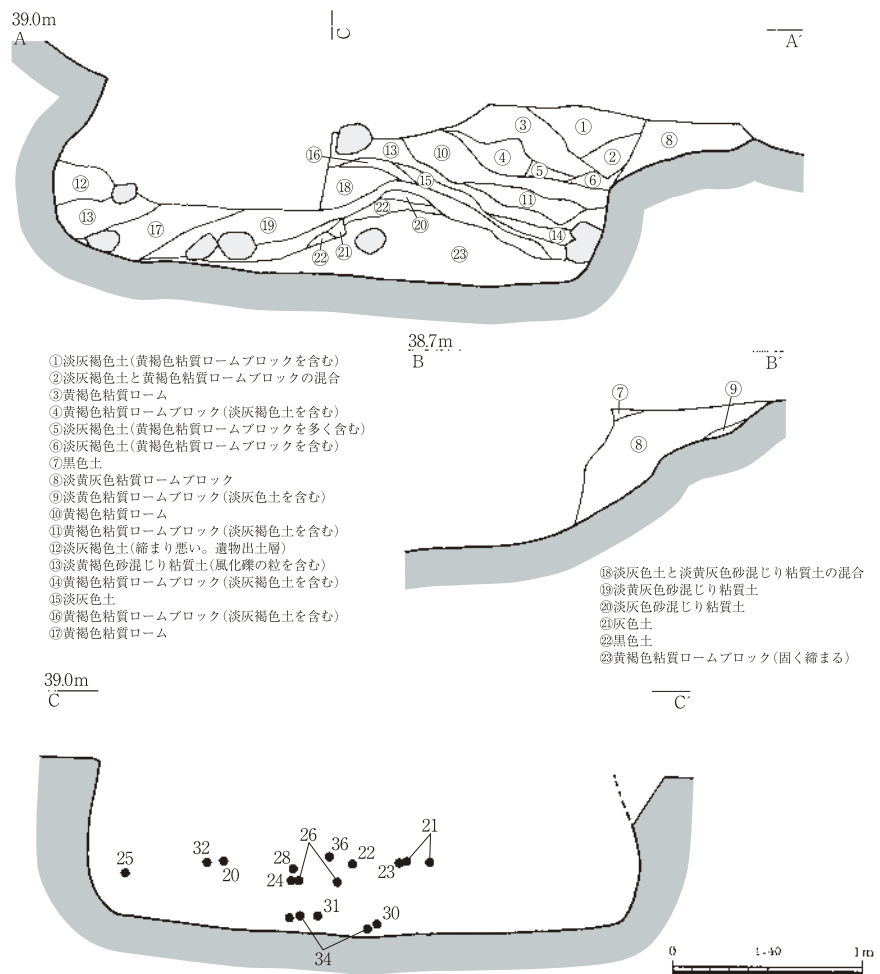
出土遺物はなく、正確な時期は不明であるが、層位的には段状遺構6(11世紀ごろ)かそれ以前と考えられる。性格は不明であるが、風倒木痕の可能性もある。(家塚)



土坑15(第253・254図、P L.64・72・73)

調査区東側のC2、C3、D2、D3グリッドの交点に位置する。検出面の標高は38.7mである。整地層をすべてはがした段階で検出したが、実際には整地層の上面から掘り込まれ、天井部の崩落した地下式横穴と考えられる。

平面形は長径3.0m、短径2.7mのほぼ円形であり、検出面からの深さは約1mで、底面は平坦である。地山の削り出しによって東側に幅1m、長さ1mの斜面が作られる。入り口と見られるが階段等の加工はない。壁



第253図 土坑15

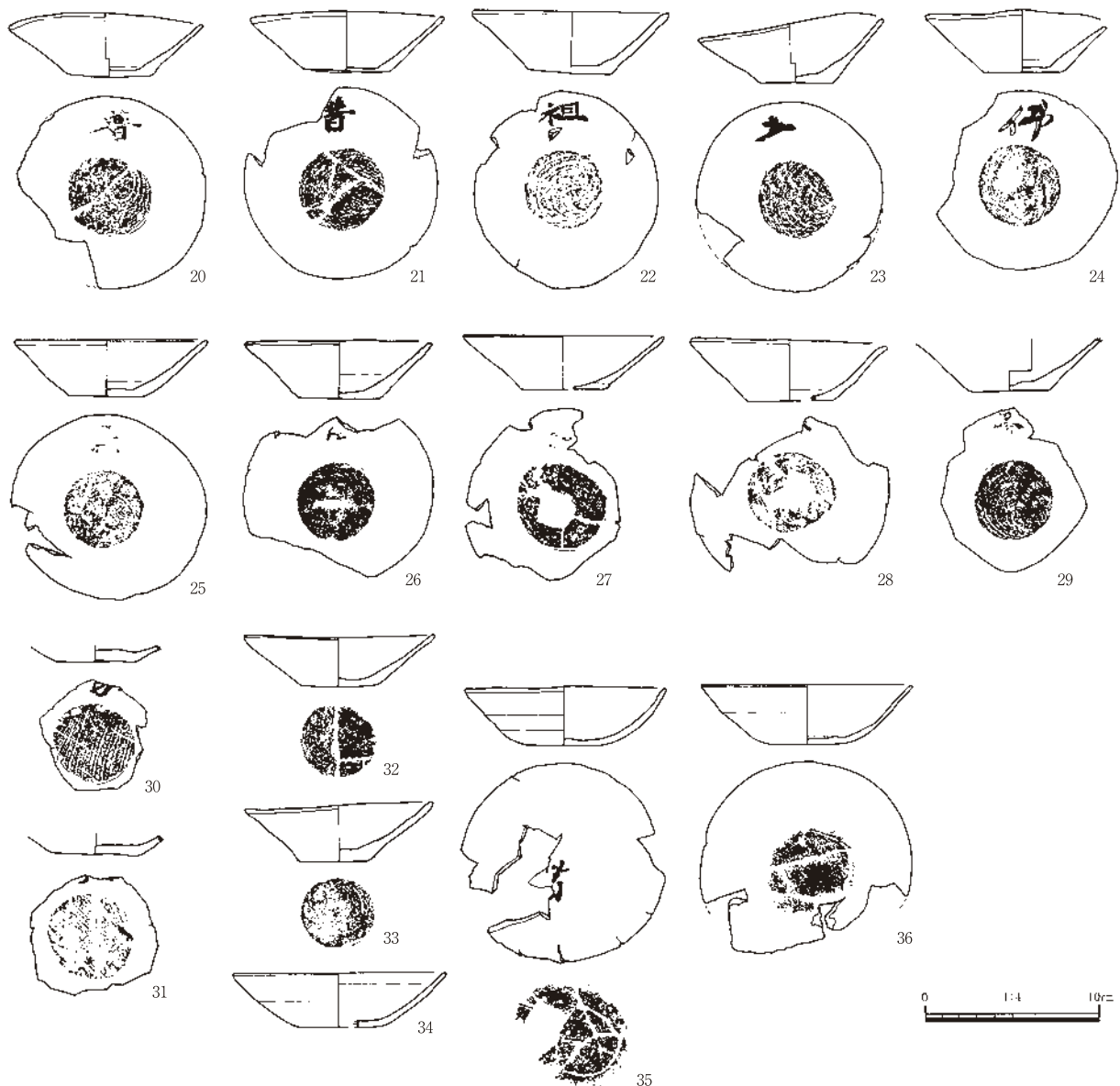
面は上がすぼまるフラスコ状を呈している。

埋土は地山にとってもよく似ており、土層断面は中心が高くなる山型を呈している。上面を覆う造成土に由来するもので、土坑の天井部の崩落とともに埋没したものと考えられる。土坑の底面部および壁面まわりの埋土中から直径20cm大の礫がたくさん出土しているが、これらは造成土に含まれていたものが、天井の崩落とともに転落したと考えられる。

入り口部の対面に当たる西側の底面および壁際の埋土中より、多量の土師器杯が出土した。多くは上向きで出土しており、体部側面及び底面に墨書されているものがある。壁際のもは底面から約20cmの高さでそろって出土していることから、土坑内の埋没の途中で持ち込まれたものと推定する。

図化したものは、土師器杯18点で、そのうち墨書が確認されたものは13点である。墨書には、「普」3点(20・21・29)、「土」1点(23)、「佛」1点(24)、「祖」1点(22)、「率?」1点(35)、不明6点(25~28・30・31)である。

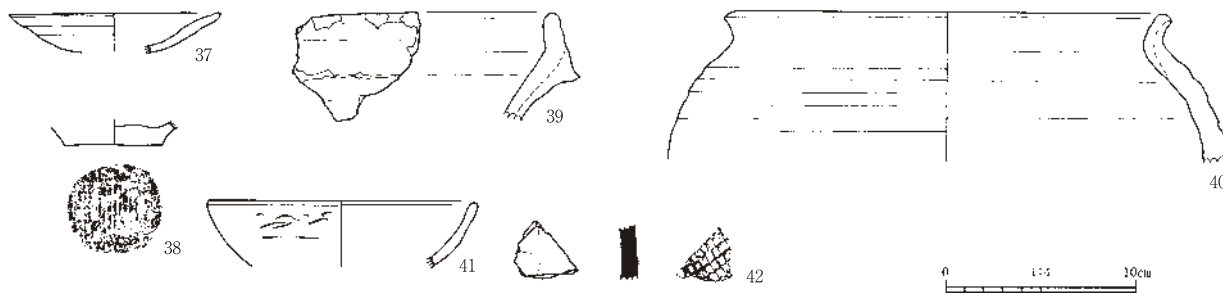
出土遺物から、中森分類により15世紀ごろのものと考えられる。土坑の入り口の埋土は石組遺構



第254図 土坑15出土遺物

3によって掘削されており、土坑15 石組遺構3の順に作られていることがわかる。これは、遺物による遺構の年代観からも矛盾しない。

形態的には、県西部によく見られる地下式横穴に似ているが、埋葬施設としてのものではなく、貯蔵用のものと理解したほうがよいと思われる。(家塚)



第256図 段状遺構1・2出土遺物

(3) 段状遺構

段状遺構1・2 (第255・256図、P L.65・66)

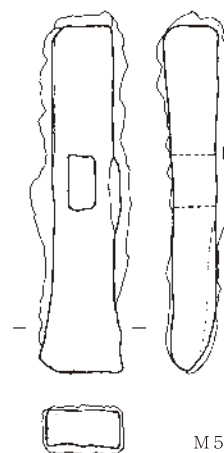
段状遺構1・2とも、調査区東側丘陵斜面部にあり、段状遺構1は標高約39.3m、段状遺構2は標高約42.5mに立地する。南側には、盛土遺構1が接している。

段状遺構1は、北東側の斜面を大きく切り崩し、その際に生じた土砂を下手側に盛り、平坦面を形成している。東端は盛土遺構1の造成土を掘削している。検出した長さは約20m、幅約5mで、法尻に沿って幅30cm～70cm、深さ20cmの溝が掘削されている。

段状遺構2は、北東側の斜面の段状遺構1よりも上手側を切り崩し、土砂を下手側に盛り上げて平坦面を形成する。その規模は段状遺構1に比べて小さく、検出した長さは15m、幅2m。西側は調査区外になり、東側は盛土遺構1の上面につながる。法尻際に長さ4mに亘って、幅30cm、深さ5cmの溝を検出した。

出土遺物には、段状遺構1盛土中からの土師器皿37、備前焼播鉢39、土師器坏38、青磁碗41、表土中からの備前焼小型甕40、段状遺構2盛土最下層からの須恵器甕片42を図化した。39はB-2類、41は青磁碗C-類に分類できる。

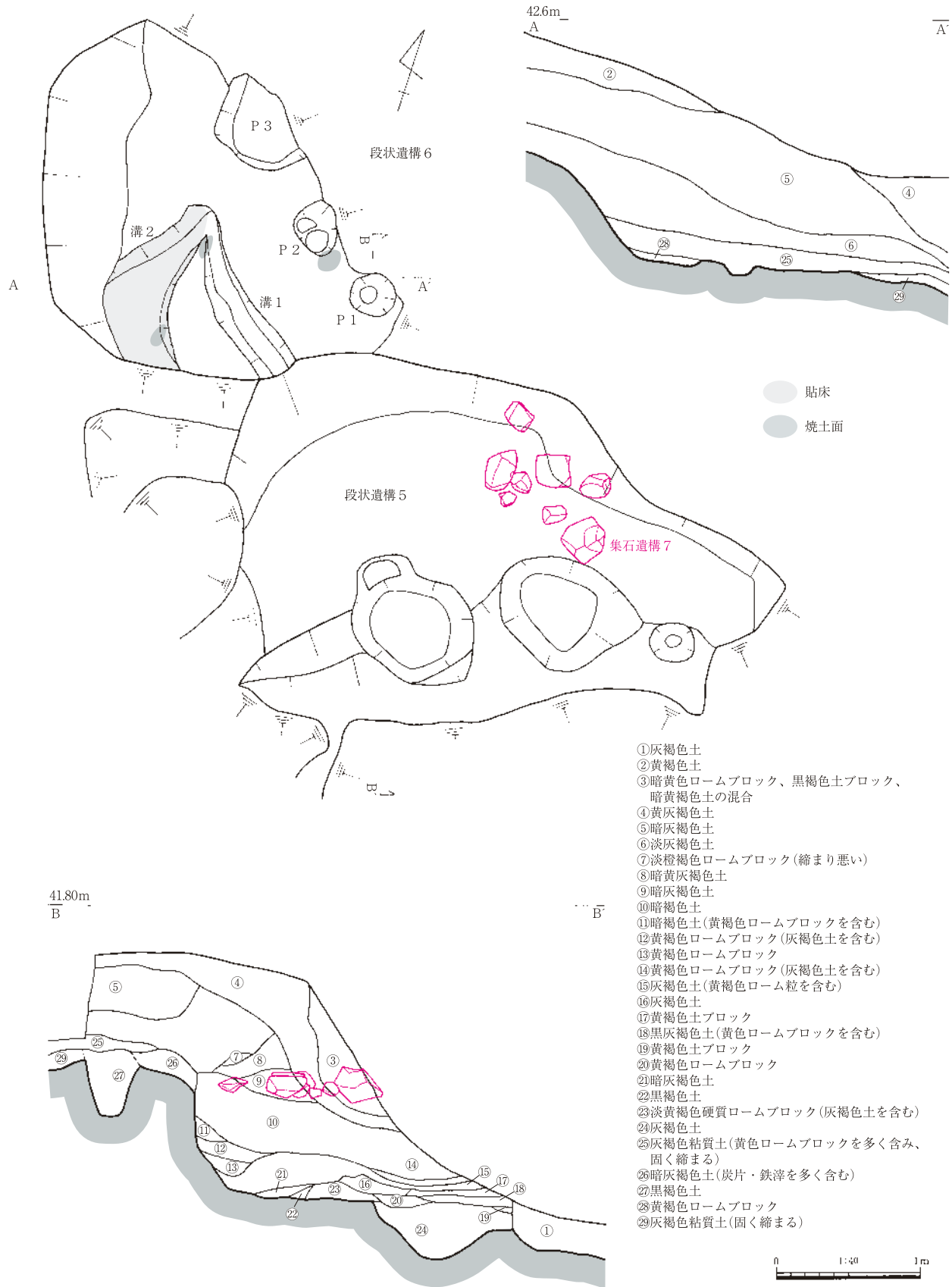
これらの遺物から、段状遺構1・2は15世紀後半から16世紀ごろに構築されたものと考えられる。性格は不明であるが、丘陵頂部の土塁・堀切等と时期的にも同時期であり、門前上屋敷遺跡の造成土上の建物と関連があるものと考えられる。(家塚)



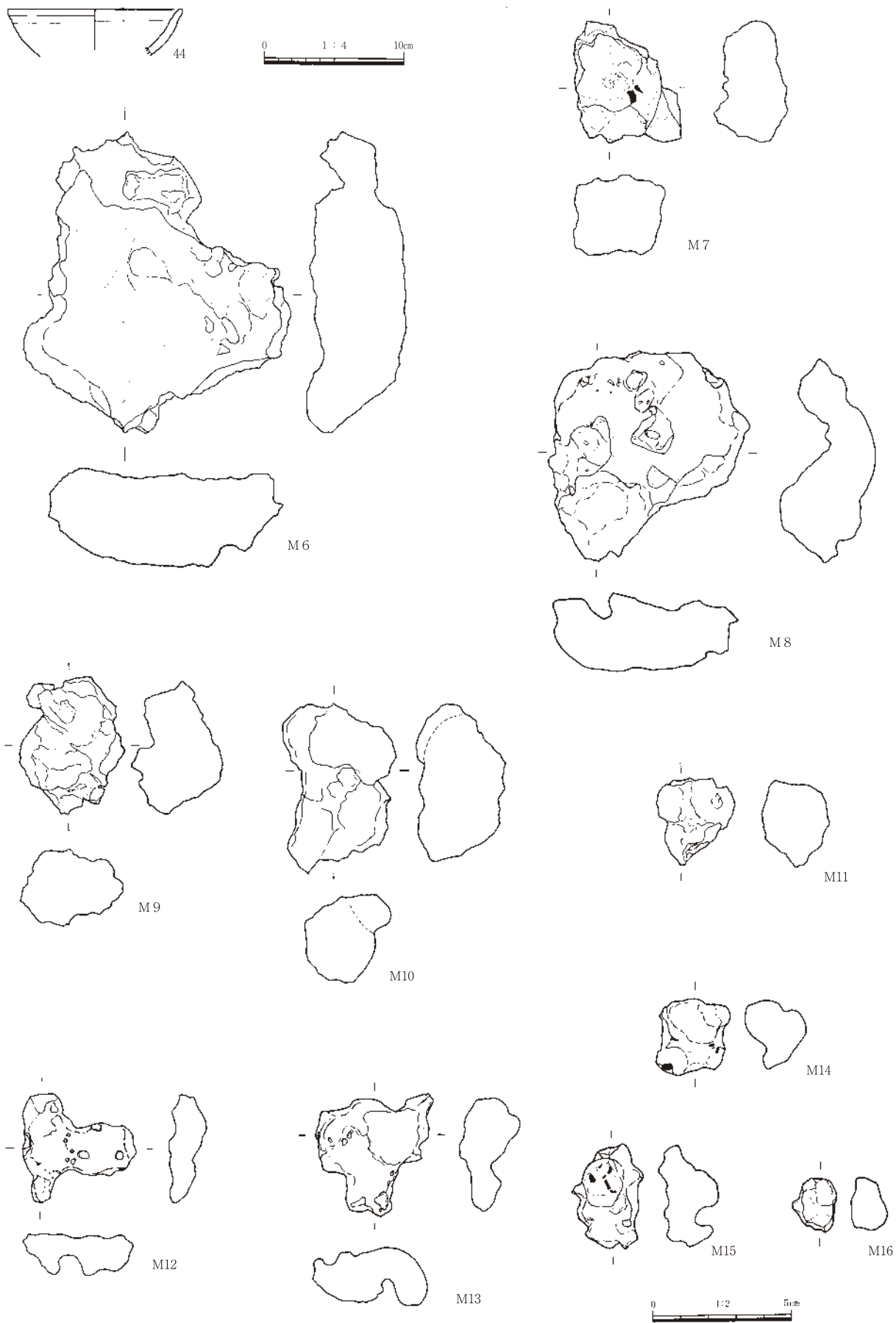
段状遺構5 (第257・258図、P L.66・76)

調査区東側のC3グリッドにあり、標高39.4～40.5mの斜面部に立地している。段状遺構6の南東側の床面および埋土を掘削した、テラス

第257図 段状遺構5出土遺物



第258図 段状遺構 5・6、集石遺構 7



第259図 段状遺構6出土遺物



第260図 段状遺構6出土遺物



第261図 段状遺構6出土遺物

状の遺構である。

底面の幅 3.5 m、奥行き 1.1 m、検出面からの深さは 0.8 m である。底面には径 50cm の土坑が存在するが、底面から約 10cm までの土の堆積はロームブロックとクロボクが互層をなす整地層によって埋め戻されている。

埋土中から、土師器壺底部 43、小型の鉄鎚 M 5 が出土したが、これらは段状遺構 6 の埋土から流れ込んだものと推測する。

底面で検出した土坑は、周辺の状況を鑑みて、この遺構掘削以前の土取りのために掘られたものと考えられる。また、この遺構自体も土取りのために掘削された可能性がある。(家塚)

段状遺構 6 (第258～261図、P L.66・76)

調査区東側の C 3 グリッドにあり、標高 40.2 ～ 41.2 m の斜面部に立地している。

北東側に下る約 20 度の斜面を掘削して段を形成している。床面の奥行きは最大で約 1.5 m、幅は 2.6 m 残存する。南側は段状遺構 5 や土取りなどの後世の掘削によって破壊されている。

床面では 2 条の溝 (溝 1・2) と 3 基のピット (P 1・P 2・P 3) を検出した。溝 1 は床面の中央に位置する。北東 - 南西方向に延び、北東端は溝 2 の端部と接し、南西端は段状遺構 5 によって切られる。長さ 1.2 m、幅 29cm、深さ 9 cm である。溝 2 は南側の壁面際から北へ向かって伸び、溝 1 と接する端部に向かって窄まる。長さ 1.2 m、最大幅 50cm、深さ 5 cm である。溝 2 は床面を構成する地山と同質のロームを使って、床面の高さまで埋め戻されている。

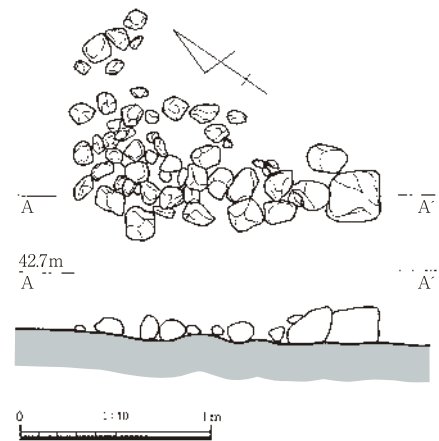
P 1 は径 32cm、深さ 45cm、P 2 は径 33cm、深さ 50cm である。これらに対し P 3 は径 70cm、深さ 18cm と皿状を呈しており、様相が異なる。埋土は P 1 が黒褐色土、P 2・3 が暗灰褐色土である。P 2 埋土中には鞆羽口片が含まれていた。

遺構埋土は、床面から 10 ～ 20cm 上が固くしまる。焼土面を 3 箇所検出したが、それらはいずれも遺構の床面よりも 5 cm 程度浮いた位置にあった。床面近くの埋土には多くの鉄滓・炭片が含まれている。特に P 1・P 2 周辺と溝 2 (埋め戻し後) 付近に集中している。焼土面が近いという共通性がある。

出土遺物には、図化できたものに土師器坏 44、椀形鍛冶滓 M 6 ～ 13、鍛冶滓 M 14 ～ 29、再結合滓 M 30 ～ 35、釘 M 38・40、棒状不明品 M 39・42、小形鑿 M 41、板状不明品 M 43、炉壁片 C 1・2、羽口片 C 3 ～ 9、粘土質溶解物 C 10・11、金床石片 S 1・2 がある。その他、埋土中から粒状滓 (M 36) 1.317 g、鍛造剥片 (M 37) 21.082 g を検出した。

小鍛冶で生成される遺物が出土していることになり、この遺構で小鍛冶が行われていたものと考えられる。上屋等に関わる遺構は検出することができなかった。

また、椀形鍛冶滓に含まれていた炭化物 2 点の年代測定を行った結果、 $950 \pm 40\text{BP.}$ 、 $1100 \pm 40\text{BP.}$ の値が得られ、およそ 9 ～ 12 世紀代の年代と判定された。(家塚・牧本)



第262図 集石遺構 1

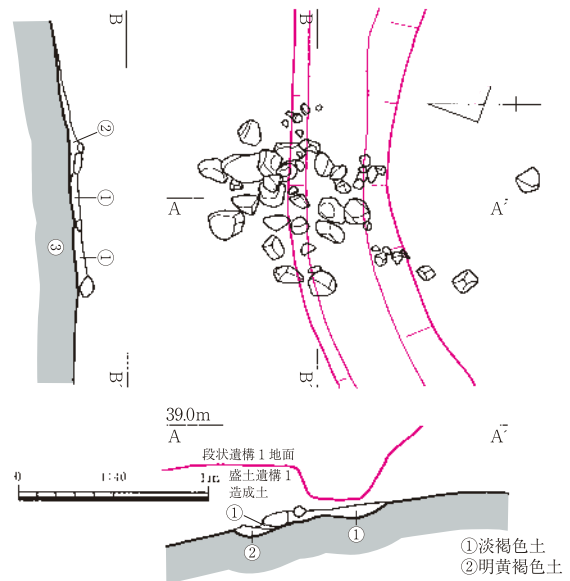
(4) 集石遺構

集石遺構 1 (第262図、P L.66)

調査区中央北側、D 4 グリッドの標高約 42.3 m の丘陵東側中腹の平坦面に立地する。下層には、段状遺構 2 があるが、伴うものではない。

拳大から人頭大の山石が、遺存状態は悪いが長軸 1.65 m、短軸 1.2 m の範囲に長形状に並べられている。重なった状況は見られない。本来一段であったものなのかは、周辺がかなり削平を受けているものと思われ不明である。石材の下部には、土坑などの付属遺構は認められなかった。

出土遺物はなく、時期、性格とも不明であるが、層位的に判断すると、段状遺構 2 (16 世紀) 以降のものである。(牧本)



第263図 集石遺構 5

集石遺構 5 (第263図、P L.67)

調査区東側の C 3 グリッドにあり、標高 38.4 ~ 38.5 m の斜面部に立地する。

盛土遺構 1 の造成土掘り下げ中に検出した。径 5 ~ 20cm の垂円礫が、径 1 m の範囲にまっけて出土した。礫は相互に重なり合う箇所もあるが、積み上げることを意図したようなものではなく、面的な広がりを示す。

礫は盛土遺構 1 の盛土最下層に包含され、旧表土上面よりもやや上に位置する。このため、盛土遺構 1 に伴うものと考えられる。礫およびその周辺においても被熱等の痕跡は認められない。

出土遺物等はなく、性格は不明である。(家塚)

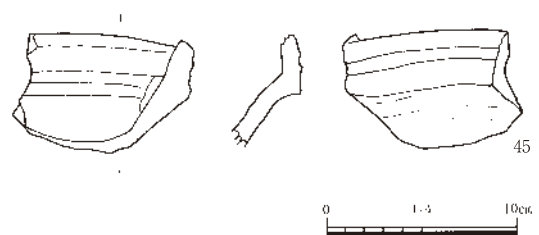
集石遺構 7 (第258図、P L.67)

調査区東側の C 3 グリッドにあり、標高 40.5 m の斜面部に立地する。

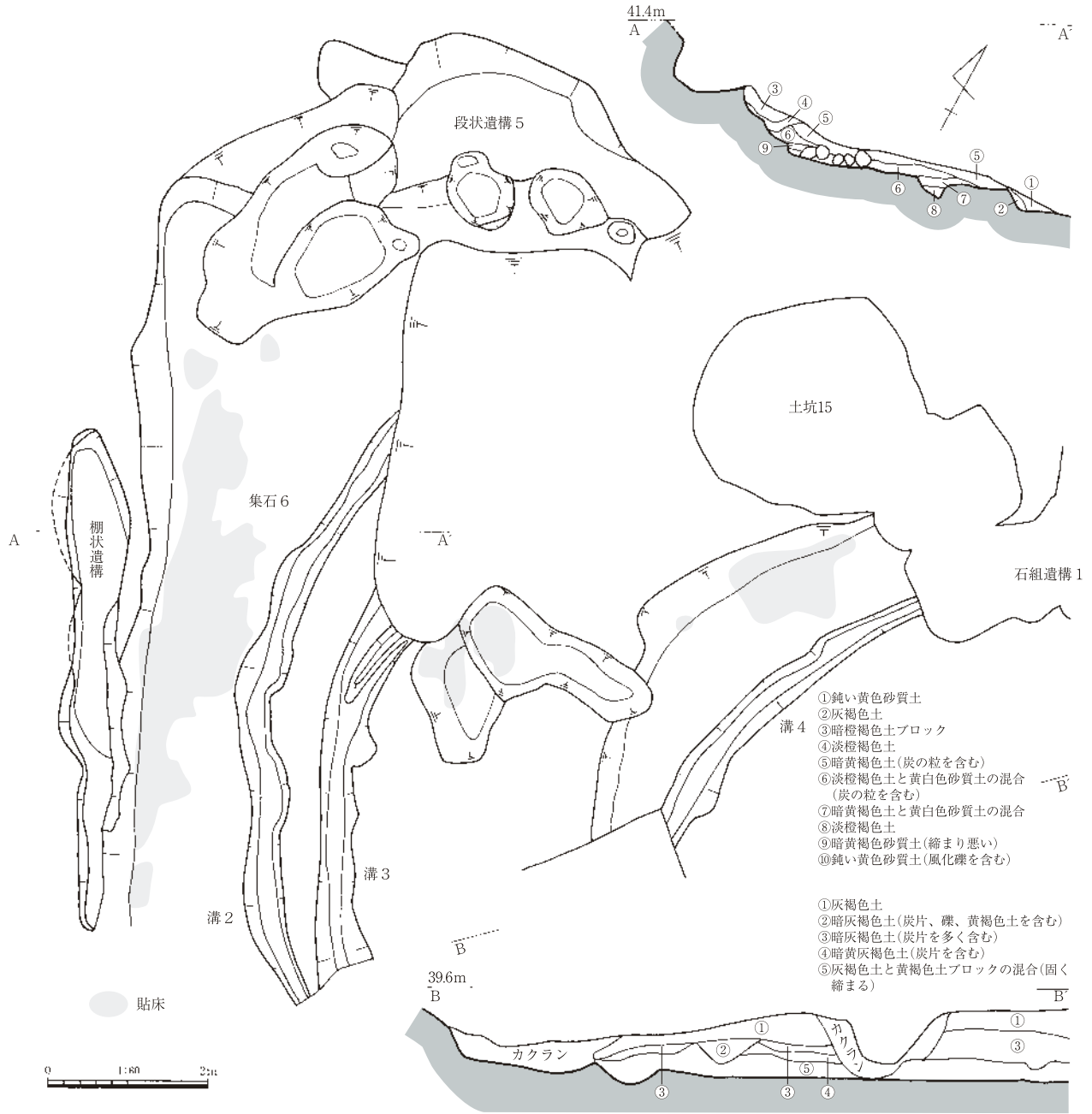
段状遺構 5 の埋土最上層 (第 257 図 B - B' 10 層) 上面を遺構検出面とし、盛土遺構 1 の造成土を埋土とする。径 10 ~ 30cm の垂角礫が径 1 m の範囲内からまっけて出土した。中心に五輪塔の地輪のような形をした礫が配されていることから、埋葬施設の可能性を考えたが、その下から遺構を検出することはできなかった。北西側に 2 m 離れた地点で土坑 10 を検出しているが、両者の検出面の標高がほぼ同じ高さ (40.5 m) であることから、同時期に存在した可能性が考えられる。(家塚)

集石遺構 6、溝 2・3・4、棚状遺構 (第 264 ~ 266 図、P L.67・74)

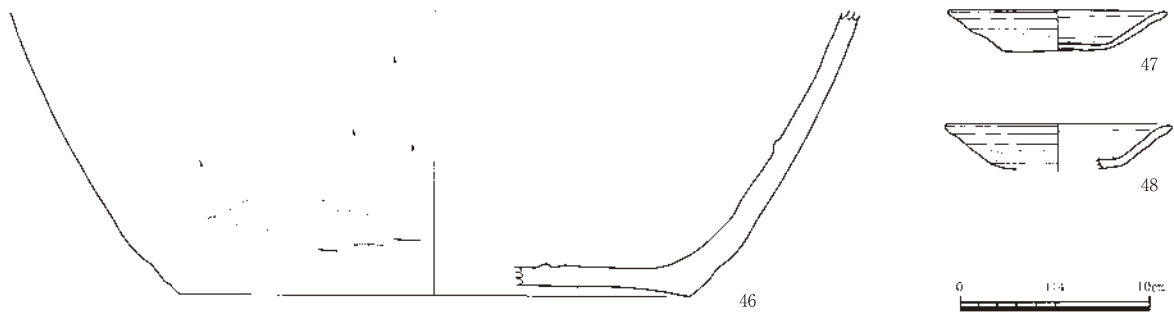
調査区東側の D 2・3 グリッドにあり、標高 39.3 ~ 40.5 m の平坦面から斜面部にかけて立地している。D 2・3 グリッド平坦面は、炭化物混じりの層によって整地されており、これらの遺構は整地土除去後に検



第264図 溝 3 出土遺物



第265図 集石遺構6、溝2～4、棚状遺構



第266図 D3グリッド整地土内出土遺物

出すことができた。

溝2は、幅24～57cm、深さ11～49cmを測るもので、断面U字状を呈す。南側は調査区外へ延び、北側は後世の攪乱によって掘削されている。検出した範囲では、長さ7.6mに亘る。やや湾曲しておよそ南北方向に走る。

溝3は、溝2に平行するように走るもので、北側は二股に分かれる。幅38～66cm、深さ12cm程度を測り、断面U字状を呈す。同じく南側は調査区外へ延び、北側は後世の攪乱によって掘削されている。

溝4は、溝2・3の東側約2m東側にあり、これらに平行するように湾曲して走るもので、幅36～58cm、深さ5cm程度と浅い。断面U

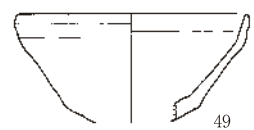
字状を呈す。南側は調査区外へ延び、北側は石組遺構3により切られている。

集石遺構6は、丘陵裾部を大きくテラス状に掘削し後に人頭大の自然礫が、長さ約7m、幅最大1.2mの範囲に、乱雑に置かれたものである。

柵状遺構は、集石遺構6の西側に立つ崖面の中腹をえぐり込み、全長6.2m、奥行き0.2～0.7m、最大高約1mの柵状に整形しているものである。底面の標高は40.6m前後であり、集石遺構6の上面よりも約0.7m上方に位置する。



第267図 溝1



第268図 溝1出土遺物

埋土の断面の記録はおこなっていないが、崖面と同質の土であり、崖面の風化によって自然に埋没したものと考えられる。遺物は出土していない。

出土遺物には、溝3からの備前焼播鉢45を図化した。また、整地土中から備前焼甕46、京都系土師器皿47・48が出土している。

出土遺物から、45は備前A期に当り、16世紀中ごろのものと考えられる。整地土中のものも、16世紀ごろのものであることから、丘陵裾部を大きく加工し、溝等が作られた後ほどなく整地されたものと考えられる。それぞれの遺構の性格は不明である。(牧本)

(5) 溝

溝1(第267・268図、P.L.67・70)

調査区東側のC4～E4グリッド東端にあり、標高42.2m～46.3mの斜面部に位置する。調査前は丘陵頂上へ続く小道であった。東側は崖となり、崖下の平坦面には石組遺構1～3や土坑15などの遺構群が立地する。

溝の断面は逆台形で、全長は15m、上幅が1.4～1.5m、下幅が0.7～1m、深さは0.5～1m。溝底は北側から南側へ上る傾斜となっていて、その高低差は2.8mである。溝底の形状はなめらかであり、階段のような加工は施されていない。溝の両端は閉じている。検出面からの深さは北側から南側に行くに従って深くなる。

埋土は自然堆積と考えられ、掘り直しは認められない。

溝底から瀬戸天目茶碗49の破片が出土した。

出土遺物から、16世紀ごろのものと考えられる。溝の北端が段状遺構2の盛土を掘削していることから、溝1は段状遺構2の形成後に作られたものである。

遺構の立地と形状及び土塁・堀切と同時期であることから、砦に関する横堀のような性格が考えられる。(家塚)

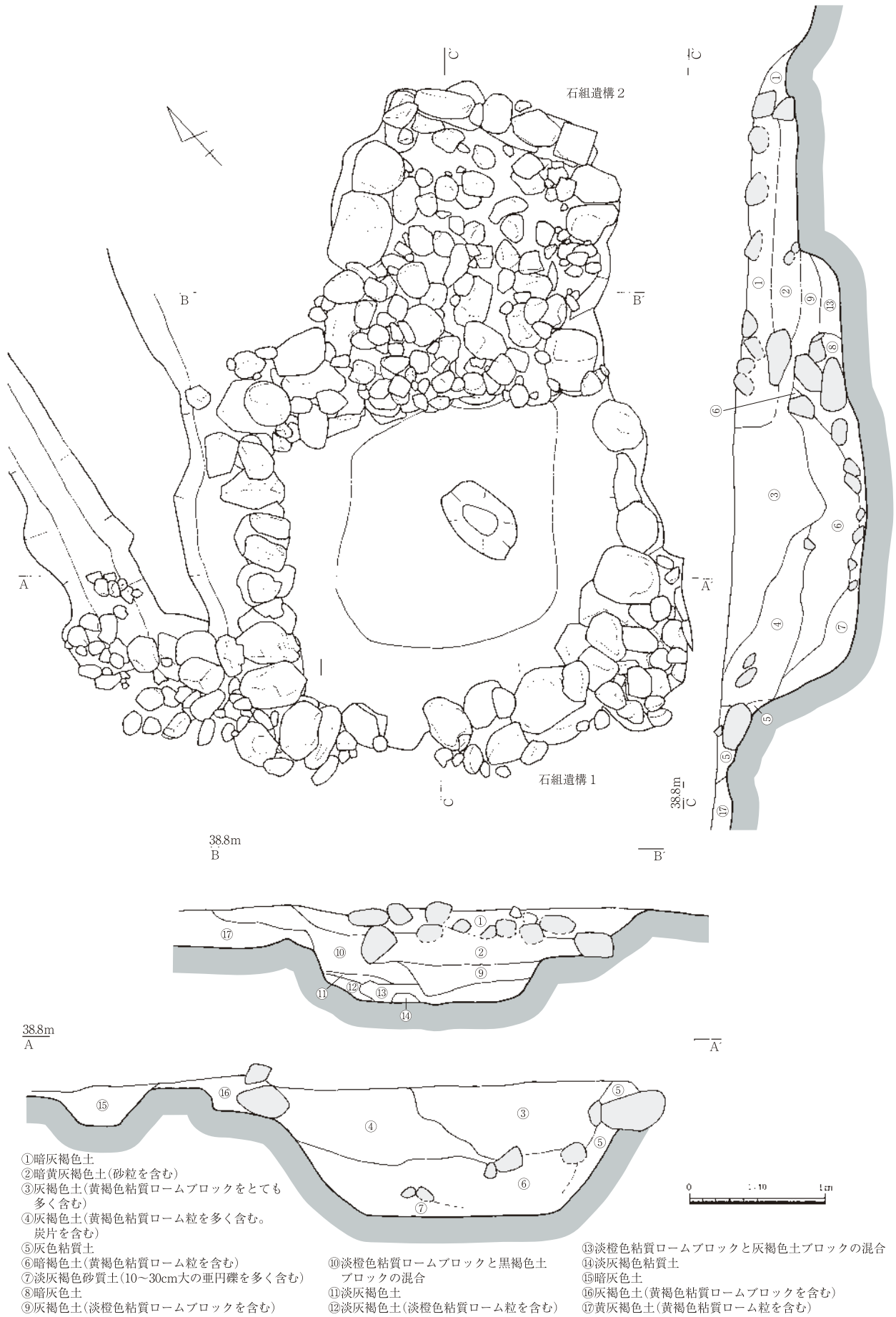
(6) 石組遺構1・2・3、土坑16、溝5(第269～273図、P.L.67・68・74)

調査区東側のC2・D2グリッド、標高37.5m前後の整地された平坦部に立地する。

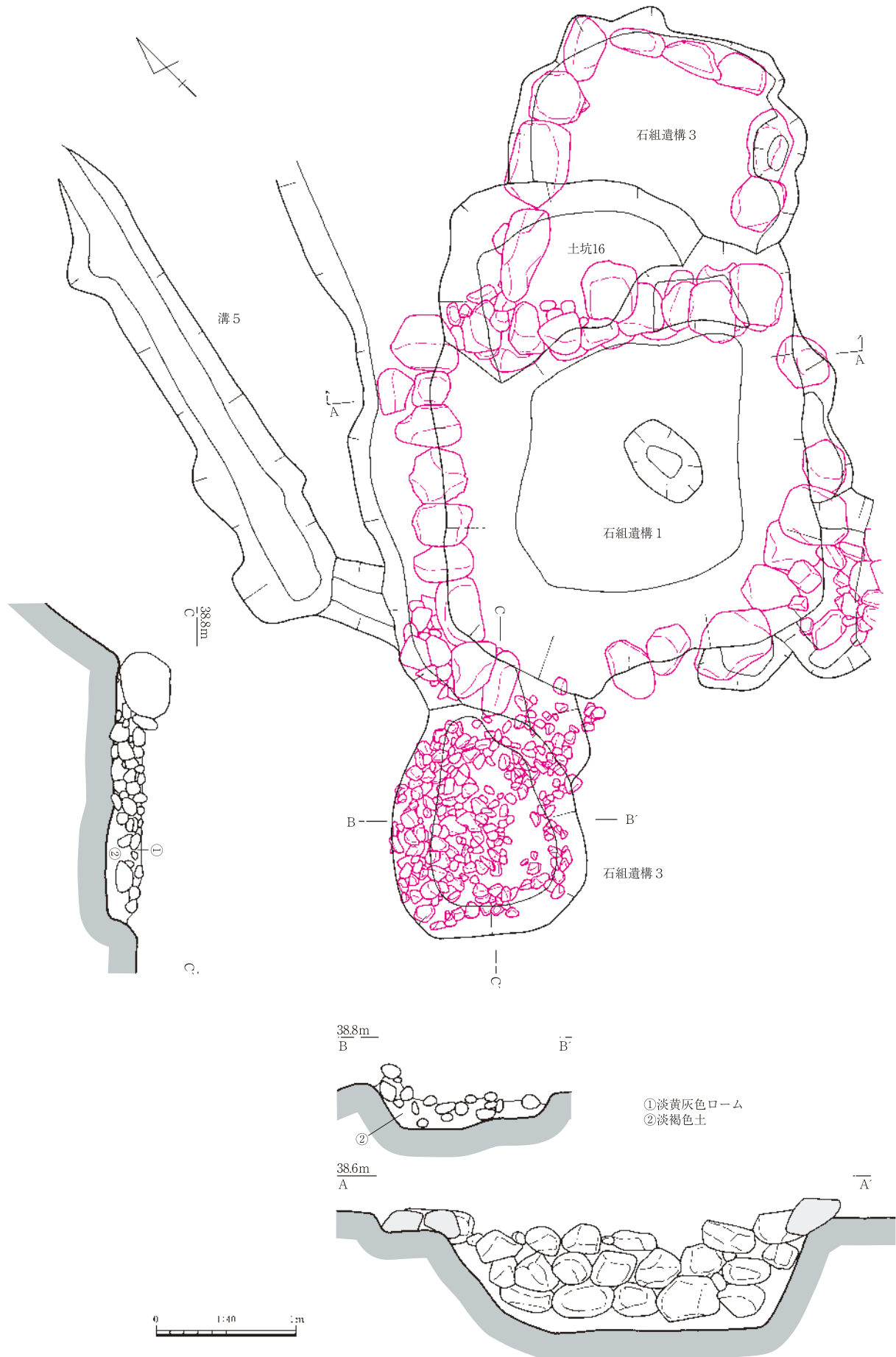
石組遺構1は、整地層の上から掘り込まれた、一辺約2.7m、深さ約1mの隅丸方形の土坑の外縁に、30～60cm大の礫を2段積みになっている。石組の外周は、3.2×3.0mの方形を呈し、北東-南西方向に長軸をとる。石組の基底石はローム土を使って根固めが施される。土坑底面は1.8×1.5mの隅丸方形である。土坑の四壁のうち、北東側の面のみ3段の石積みが施されている。この部分は先行する土坑16と切りあう箇所にあたる。土坑内には石積みの礫と同様の礫が多量に転落していたことから、当初の石積みは3段以上あったものと推定される。土坑の南隅と西隅には石組の溝がつながっている。

出土遺物は、埋土中からの土師器鍋50、土師器坏底部51、備前焼播鉢52、須恵器高台付盤53、鉄釘M44を図化した。

石組遺構1の西隅から北へ向かって延びる溝5は、整地層上面で検出した。溝の幅は約50cm、深さ約30cmで、断面は逆台形を呈する。溝の底面の傾斜は北へ向かって下っていく。土坑埋土の最下層は粘性を帯び、砂を多く含むことから、土坑内への水の流れ込みが考えられる。南隅側の溝から土



第269図 石組遺構 1・2

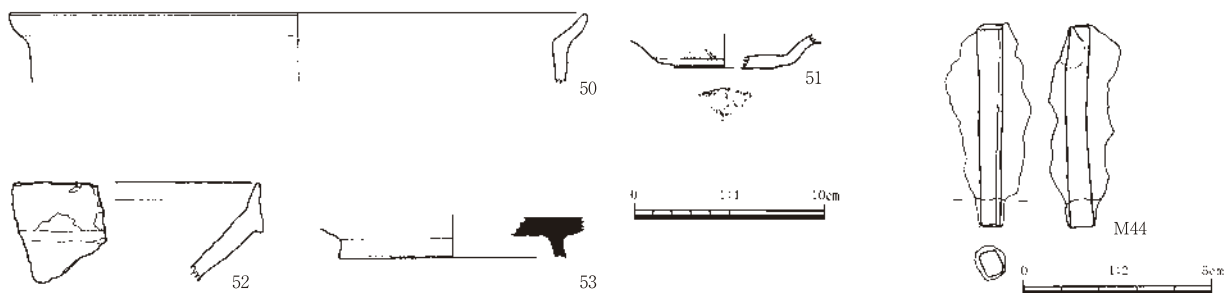


第270図 石組遺構1～3

坑内に水が流れ込み、あふれた水が溝5を通じて北へ導かれたものと推測され、石組遺構1は沈砂の役割をもつと考えられる。土坑内と南東側の溝はロームブロックを多く含む土によって埋め戻されている。

石組遺構2は、石組遺構1の北東辺で接し、柄鏡の柄状に北東側へ延びる。長軸は北東-南西を取るが、石組遺構1よりも東に振れ、一致しない。2.5 × 2.2 m、深さ0.4 mの方形の土坑の内周に沿って2段積みの石組を持つ。東隅に当たる礫は五輪塔の地輪を転用したものである。南隅に当たる礫が石組遺構1を埋め戻した土の上面にあることと、自然堆積と考えられる埋土の違いから、石組遺構2は1よりも後に作られたものとする。しかし南西辺側の石列は不明瞭であり、両方が一連の遺構であった可能性もある。

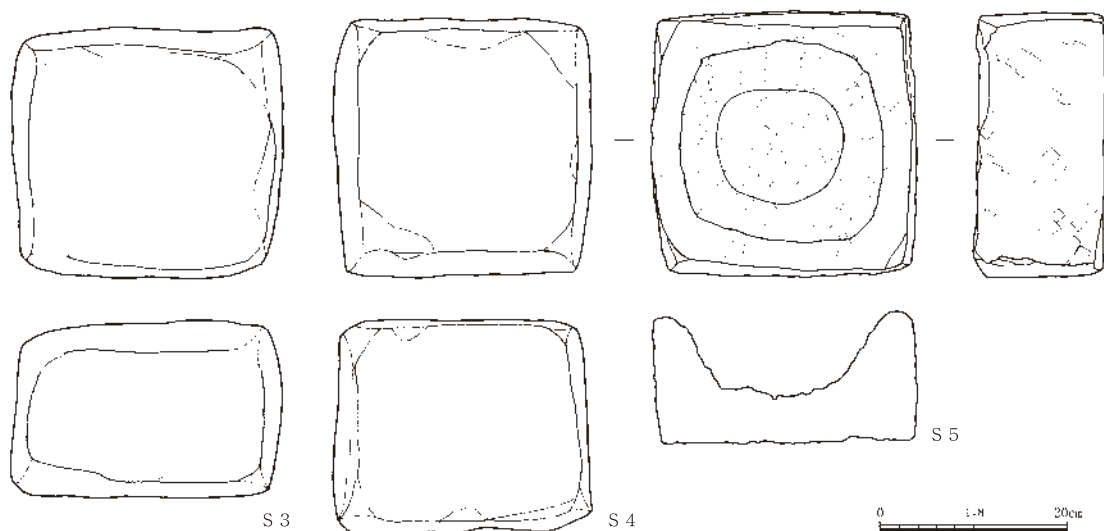
土坑の底面は平坦であり、土坑内には石組に使われるものよりも小振りの10cm ~ 40cm 大の礫が



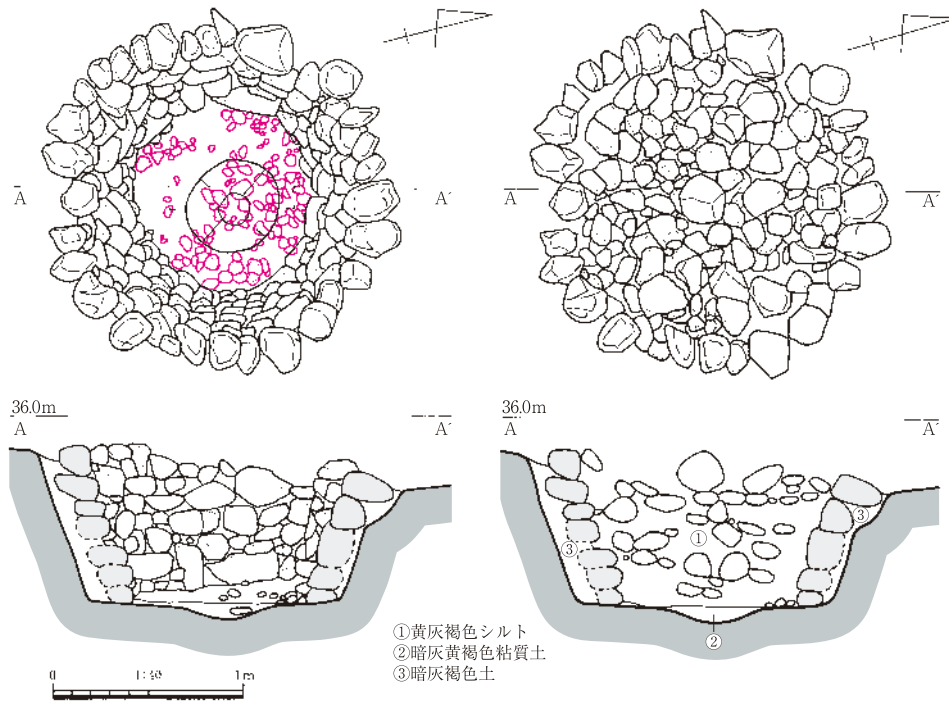
第271図 石組遺構1 出土遺物



第272図 石組遺構2 出土遺物



第273図 石組遺構2 出土遺物

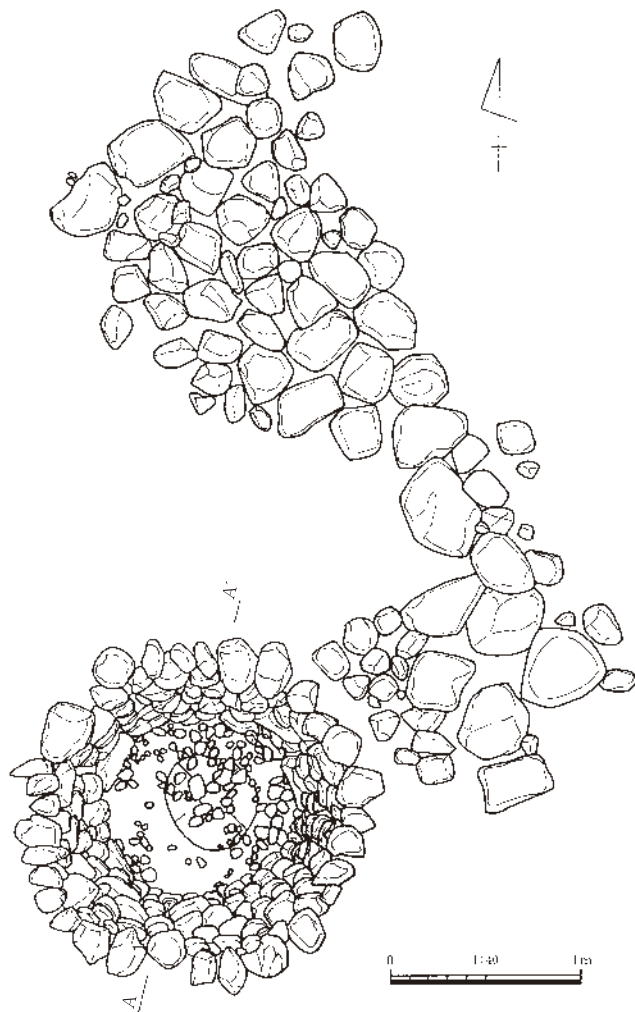


第274図 石組井戸

乱雑に入っている。これらの礫は石組に用いられていたものが転落したものと推測される。埋土中からは土師器皿 54 ~ 57 が出土している。また、地輪 S 3 ~ 5 を図化した。

石組遺構 3 は、石組遺構 1 の西隅に接する。径 1.3 × 1.6 m、深さ約 0.3 m の隅丸方形の土坑内に拳大の円礫を密に敷き詰めている。特に北西側の底面から壁面にかけての範囲に礫が多い。この礫の上に石組遺構 1 の基底石が乗り、土坑は整地土で埋め戻されていることから、石組遺構 3 は 1 に先行するものと推測される。石組遺構 3 は南西側で溝 4 を、北西側で土坑 15 を切ることから、それらよりも後出するものである。

土坑 16 は、石組遺構 2 の底面で埋土上面を検出した。石組遺構 1 の北東側に土坑部分が 1.4 m 拡幅したような形態をとる。検出面から底面までの深さは 0.4 m であるが、石組遺構 1 の土坑底面よりも約 0.2 m 高い。土坑内の埋土は石組遺

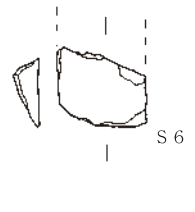


第275図 石組井戸・石敷き遺構

構1の北東辺の石組設置に伴う、人為的なものである。

土坑底面に砂や粘土などの堆積が認められないことから、石組遺構1を設置する際に、設計変更などの理由により掘り過ぎた部分を埋め直し、壁面保護のために土坑底面から石組みを施したと推測する。

これらの遺構は、出土遺物から16世紀ごろのものと考えられる。(家塚)



第276図 石敷き遺構出土遺物

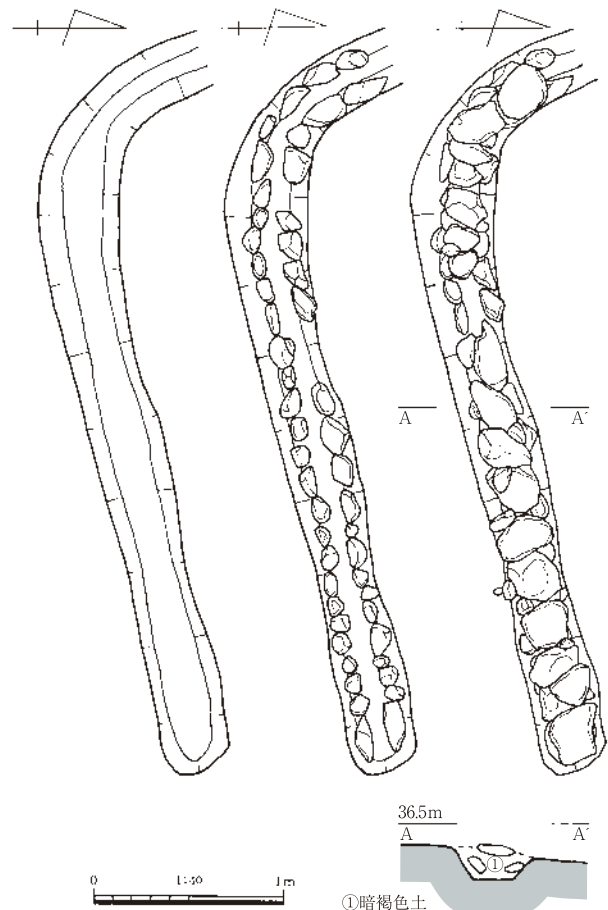
(7) 石組井戸・石敷き遺構(第274~276図、P L.69)

調査区東側のC2グリッドにあり、造成土除去後の暗灰褐色土を掘り下げた後に検出した。標高は48.5m前後である。

石組井戸は、地山自然礫を用いて築かれている。平面円形を呈し、検出面では長軸1.5m、短軸1.4m、底面では長軸0.96m、短軸0.9m、深さ0.8mを測る。石材は、上面に向かうほど傾斜し断面逆台形状を呈す。底面やや北東側は、約8cmに一段深くなっている。底面はやや皿状を呈し、径5cm前後の栗石が敷かれている。現状では、7段程度に積み上げられているが、本来は10段前後に積まれたものと考えられる。内部には、黄灰褐色シルト層とともに多量の石材が落ち込み、最下層には暗灰黄褐色粘質土が堆積している。

形態的には井戸としてよいが、水が湧いている状況は窺えず、単に貯水する性格の可能性もある。

石敷き遺構は、石組井戸の北東側に接し、逆L字状に人頭大の扁平な自然礫が敷かれていた。北側に向かって低く傾斜し、約15cmの高低差がある。



第277図 石蓋暗渠

両遺構の位置関係から一体のものと考えられ、石敷き遺構は、石組井戸の通路として機能していた可能性がある。

石敷き遺構から砥石片S6が出土しているが、正確な時期は不明である。いずれも、層位的には門前上屋敷遺跡14・15区造成土下で検出された田畠跡以前のものと考えられ、15世紀ごろのものと考えられる。(牧本)

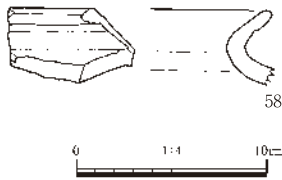
(8) 石蓋暗渠(第277図、P L.69)

調査区東側、C2グリッドにあり、造成土除去後黒褐色土遺物包含層を除去中に、標高36.3m前後の斜面地テラス上面で検出された。門前上屋敷遺跡15区から延びる石垣状の集石1の下場付近に

隣接している。東側約 2.5 m に石組井戸がある。

ほぼ東西に走るが、北西側は逆 L 字状に折れ、流失している。幅 0.3 ~ 0.45 m、深さ 0.15 m 前後の溝内に、拳大前後の自然礫を側壁に沿わせて並べ、その上に扁平な人頭大前後の石材を蓋石として被せている。長さは 4.1 m 以上にわたる。底面はほぼ平坦である。溝埋土は、暗褐色土である。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、層位的に造成以前の中世後期ごろのものと考えられ、石組井戸の導水施設の可能性がある。(牧本)

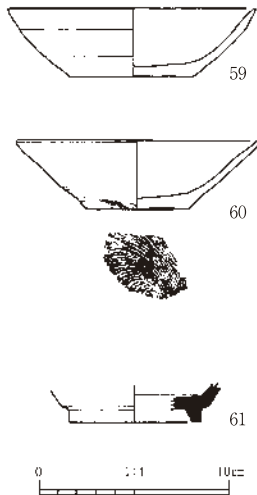


第279図 P 8 出土遺物

(9) 道状遺構 (第 278 図)

調査区東側の C 3・4 グリッドにあり、標高 38.8 ~ 42.4 m の北東側へ傾斜する斜面部に立地する。盛土遺構 1 と段状遺構 2 の盛土の下層で検出した。

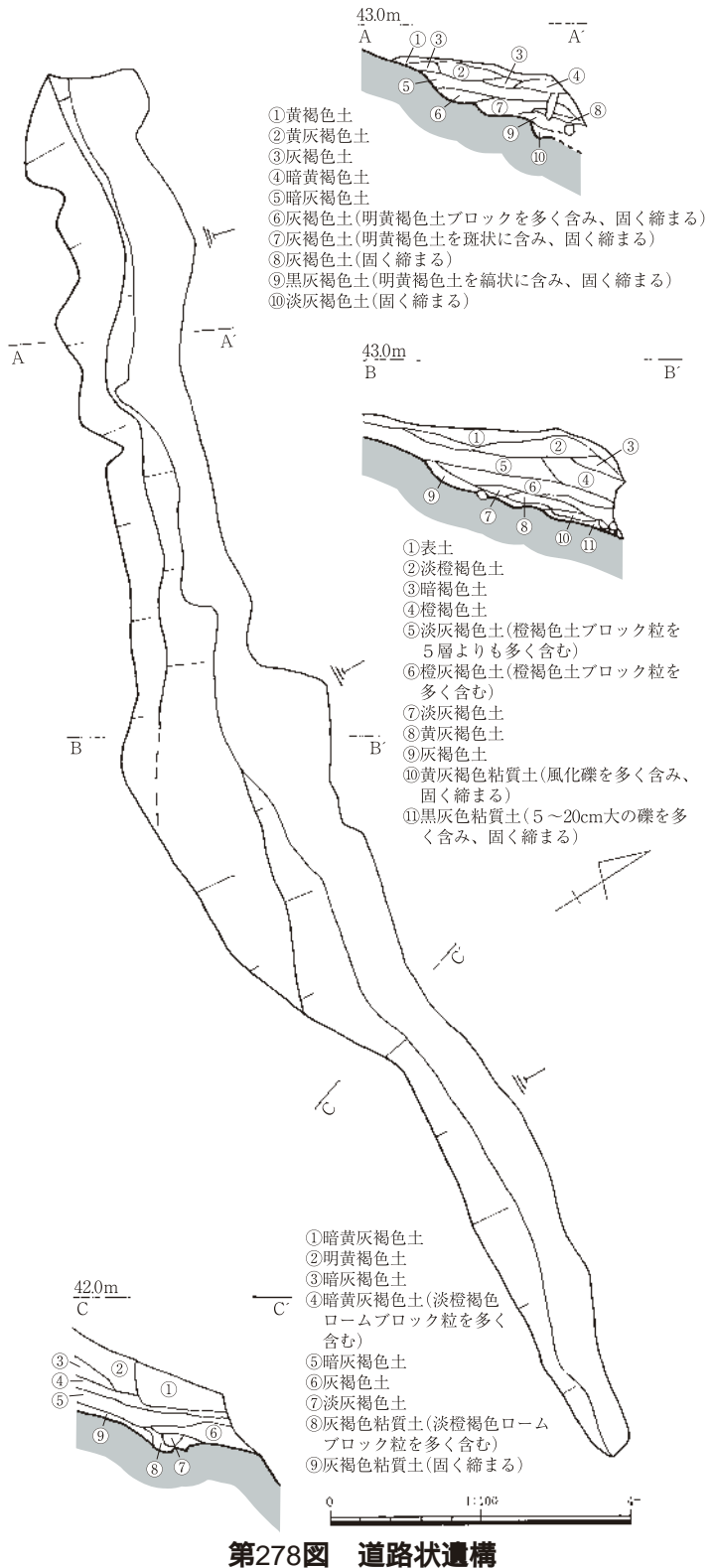
斜面を段状に削り、礫と土で路面を造



第280図 造成土中出土遺物

成したもので、東側から西側へ向かう、高低差 3 m の上り坂道である。検出した長さは約 20 m、道幅は 1 ~ 1.5 m である。

出土遺物はなく、時期は不明であるが、層位的に判断すると、9 ~ 12 世紀の段状遺構 6 に関連する可能性がある。(家塚・牧本)

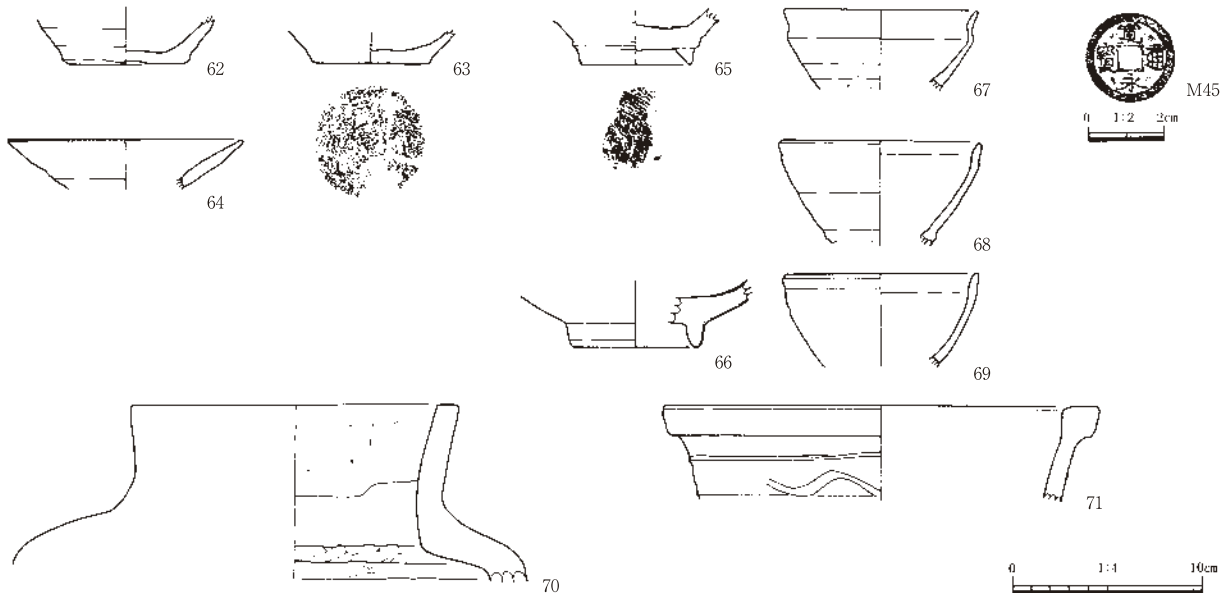


第278図 道路状遺構

(10) ピット群 (第219・279図)

調査区東側のC2グリッドにあり、標高37.7～38mの斜面部に位置する。黒褐色土包含層を除去下後にローム層上で散在した計9個のピットを検出した。本来は、包含層中から掘り込まれたものであろう。

P8内で備前焼甕58が出土している。性格は不明であるが、出土遺物から、中世ごろのものと考えられる。(牧本)



第281図 造成土上面遺構外出土遺物

(11) 造成土出土遺物 (第280図、P.L.75)

当遺跡東側から門前上屋敷遺跡15区にかけて、大規模な造成が行われていることは、すでに述べてあるが、当遺跡側でこの造成盛土中で土師器及び須恵器を検出した。土師器坏59は、伏せた状態でほぼ完存している。土師器坏60、須恵器高台付坏61は、サブトレンチで確認中に検出している。

51は、平安時代ごろのもので、混入したものと思われるが、59・60は、中森分類によれば15世紀ごろのものと考えられ、この造成が行われた時期を示すものと考えられる。(牧本)

(12) 造成土上面出土遺物 (第281図)

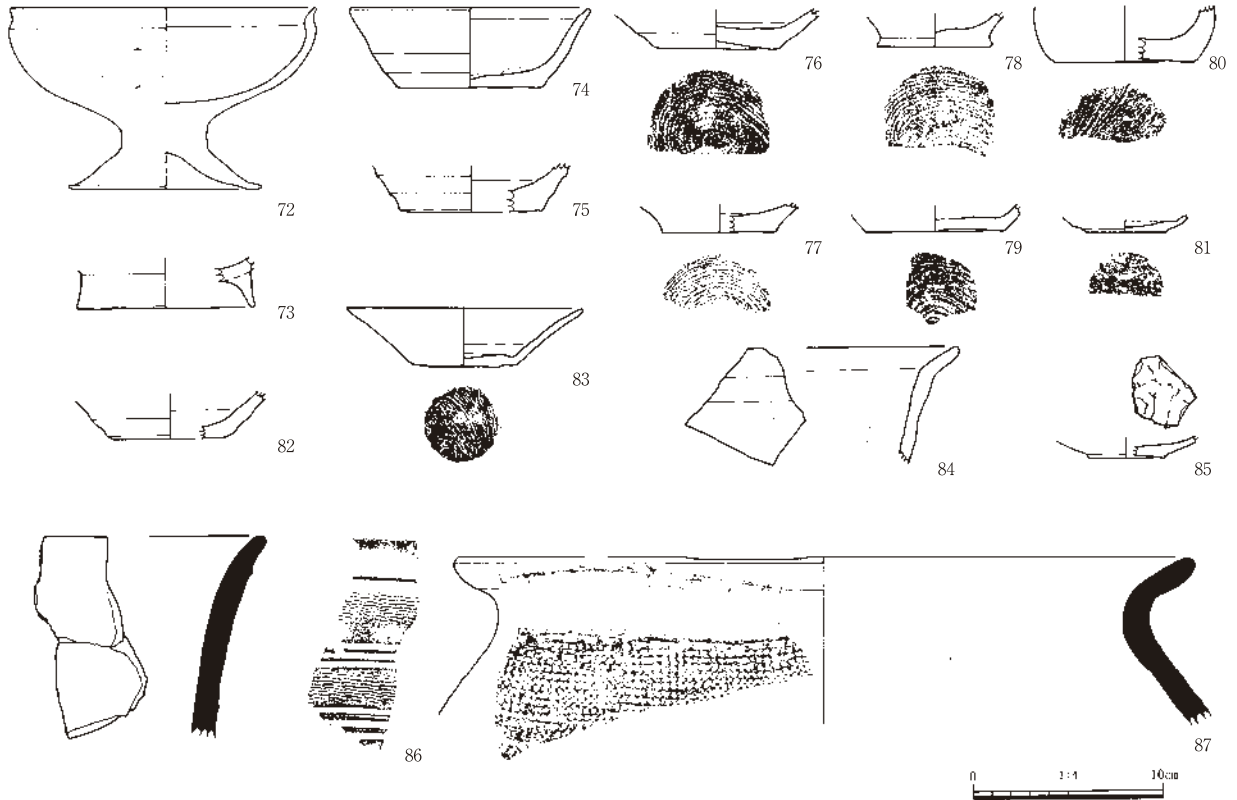
門前上屋敷遺跡に延びる造成土上面は、現代まで宅地として利用されており改変が著しい状態であったが、門前鎮守山城跡側での検出作業中に出土した遺物について触れる。

図化したものには、土師器坏62～64、土師器高台坏65、青磁碗66、瀬戸天目茶碗67～69、瓦質土器壺70、陶器鉢71、寛永通寶M45である。M45は 期古寛永銭である。

概ね中世後期(16世紀)から近世にかけてのものであり、すでに失われている造成土上で営まれたであろう遺構の存続期間を示しているものといえる。(牧本)

(13) 造成土下包含層出土遺物 (第282・283図、P.L.75)

厚さ約1.5m前後を測る造成土を除去した後に、さらに下層を掘り下げた段階で出土した遺物につ



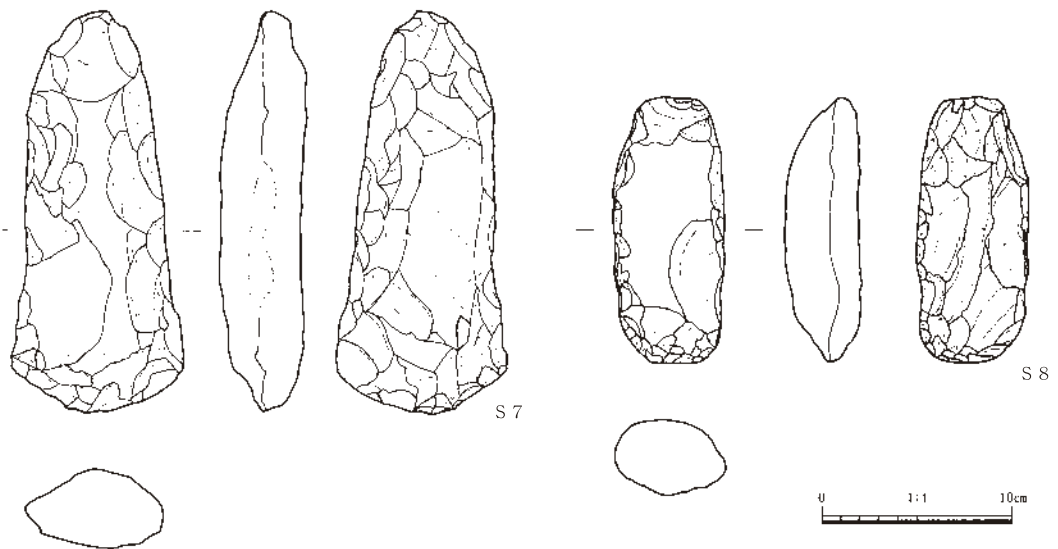
第282図 造成土下遺物包含層出土遺物

いて触れる。確実な遺構には伴ってはいないが、門前上屋敷遺跡で検出された田畠やそれ以前の遺構に属する遺物であろう。

図化したものは、短脚付碗 72、土師器高台付坏 73、土師器坏 74 ~ 83、土師器鍋 84、白磁皿 85、須恵器大型甕口縁部 86、須恵器甕 87、打製石斧 S 7・8 である。72 は、古墳時代中期ごろのものと考えられる。73・86 は奈良時代ごろ、74・75 は平安時代ごろ、76 ~ 84 は 15 世紀ごろのものと考えられる。85 は白磁皿 類にあたり、12 世紀ごろのものと考えられる。打製石斧 S 7 は、形態的には

弥生時代ごろのものと考えられようか。打製石斧 S 8 は、厚味があり風化が進んでいることから、縄文時代に遡るものと考えられる。

(牧本)



第283図 造成土下包含層出土遺物

第5節 遺物観察表

表33 門前鎮守山城跡出土遺物観察表(1)

挿図	遺物番号	遺構・地区・層位名	種類	器種	材質	法量 (cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
第226図	1	土塁盛土中	須恵器	壺		器高 4.9 底径 12.0	内外面とも回転ナデ。	密	良好	内外面とも灰色	
第226図	2	堀切	土師器	坏		器高 2.9	内外面ともナデ。	やや粗(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面とも黄橙色	
第226図	3	堀切	土師器	坏		器高 1.4	内外面とも回転ナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	
第235図	4	土坑7	縄文土器	鉢?		器高 3.9	内外面粗い条痕。	粗(1-1.5mm大の砂粒含む)	やや不良	内外面とも褐色	
第235図	5	土坑7	弥生土器	壺		器高 4.0	外面口縁端部刻目。頸部条痕。頸部と胴部の境に突帯。内面粗い条痕。	やや粗(1mm大の砂粒含む)	良好	内外面とも橙色	外面スス附着。
第239図	6	集石2	陶器	皿		口径9.6 器高1.9 底径3.6	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	内外面とも橙色	
第242図	7	段状遺構3底面	土師器	羽釜		口径 21.4 器高 2.6	外面ヨコナデ。内面剥離のため調整不明。	密	良好	内外面とも橙色	外面スス附着。
第242図	M1	段状遺構3底面	古銭	元祐通寶		径2.5 厚さ0.13					
第242図	8	段状遺構4埋土中	土師器	鍋		器高 10.4	外面口縁部ヨコナデ。体部粗いタテハケ。内面後円部ヨコナデ。体部粗いヨコハケ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	外面スス附着。
第244図	9	盛土遺構1	瓦質土器	羽釜		口径 21.6 器高 4.2	外面口縁部ヨコナデ。体部ケズリ。内面ヨコナデ。	密	良好	内外面とも暗オリーブ灰色	外面スス附着。
第244図	10	盛土遺構1	備前焼	播鉢		器高 7.3	外面ヨコナデ。内面ヨコナデ後粗い6条の播目。	密	良好	内外面とも明赤褐色	B-2類
第244図	11	盛土遺構1	土師器	坏		器高 2.0 底径 6.6	外面体部ナデ。底部回転系切り。回転ナデ。	密	良好	内外面とも橙色	底部一部黒斑あり
第244図	12	盛土遺構1	土師器	火鉢?		器高 2.0	外面二段に三角形スタンプ文。内面粗いハケ。	密	良好	内外面ともにぶい橙色	
第245図	13	盛土遺構下灰褐色土包含層C3	常滑焼	甕		器高 9.8	外面平行叩き後ナデ。2箇所格子叩き文間に菊花文。内面粗いナデ。	密	良好	外面にぶい赤褐色。内面にぶい褐色	
第249図	14	土坑10	土師器	坏		口径13.0 器高4.0 底径6.1	外面体部ヨコナデ。底部回転系切り後板目。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	外面にぶい黄橙-浅黄橙色。内面明黄褐色-浅黄橙色	外面底部黒斑
第249図	15	土坑10	土師器	坏		口径13.2 器高4.0 底径7.1	外面体部ヨコナデ。底部回転系切り後ナデ。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	外面にぶい黄橙色。内面にぶい黄橙-浅黄橙色	体部外面爪痕
第249図	16	土坑10	土師器	坏		口径12.8 器高4.55 底径6.95	外面体部ヨコナデ。底部回転系切り後板目。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	内外面ともにぶい黄橙-にぶい黄褐色	
第249図	17	土坑10	土師器	坏		口径13.0 器高4.0 底径6.1	外面体部ヨコナデ。底部回転系切り。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	外面にぶい黄橙-浅黄褐色。内面明黄褐色-浅黄褐色	体部外面爪痕
第249図	18	土坑10	土師器	坏		口径12.7 器高3.8 底径7.0	外面体部ヨコナデ。底部回転系切り後ナデ。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	外面黄橙-にぶい浅黄褐色。内面にぶい黄褐-にぶい黄褐色	
第249図	19	土坑10	土師器	坏		口径13.2 器高3.55 底径7.4	外面体部ヨコナデ。底部回転系切り後板目。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	良好	外面にぶい黄橙-にぶい黄褐色。内面にぶい黄橙-浅黄褐色	
第249図	M3	土坑10	鑄鉄	鍋		口径40.2 器高 21.6 底径 35.6	受口口縁をもつ鑄鉄製鍋。体部から低部に別の鉄器が付着していたか。				湯口痕跡なし
第249図	M4	土坑10	古銭	聖宋元寶		径2.4 厚0.15	風化著しい。				
第254図	20	土坑15	土師器	坏		口径11.1 器高3.7 底径4.8	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	内外面とも浅黄橙-橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書「普」。

表34 門前鎮守山城跡出土遺物観察表(2)

挿図	遺物番号	遺構・地区・層位名	種類	器種	材質	法量 (cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
第254図	21	土坑15	土師器	坏		口径11.1 器高3.5 底径5.0	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	外面橙色。内面黄橙～橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書「普」。
第254図	22	土坑15	土師器	坏		口径11.1 器高3.7 底径4.4	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	外面橙色。内面浅黄橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書「祖」。
第254図	23	土坑15	土師器	坏		口径10.65 器高4.15 底径4.3	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	外面明褐色。内面浅黄橙～橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書「土」。
第254図	24	土坑15	土師器	坏		口径10.3 器高3.5 底径4.4	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	不良	外面浅黄橙～明黄褐色。内面浅黄橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書「佛」。
第254図	25	土坑15	土師器	坏		口径11.1 器高3.2 底径4.4	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	やや粗(石英・長石含む)	やや不良	内外面とも浅黄橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書。文字不明。
第254図	26	土坑15	土師器	坏		口径 10.8 器高3.3 底径 4.6	外面体部ヨコナデ。底部回転系切り。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	やや不良	内外面とも浅黄橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書。文字不明。
第254図	27	土坑15	土師器	坏		口径 11.4 器高3.15 底径4.9	内外面とも風化のため調整不明。外面底部回転系切りか。	密	やや不良	外面浅黄橙～橙色。内面黄橙色	内外面化粧土施す。体部外面墨書。文字不明。
第254図	28	土坑15	土師器	坏		口径 11.2 器高3.6 底径4.6	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面体部回転ナデ。底部ヨコナデ。	密	やや不良	内外面とも黄橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書。文字不明。
第254図	29	土坑15	土師器	坏		器高 2.85 底径4.6	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	外面黄橙～橙色。内面黄橙色	体部外面化粧土施す。墨書「普」。
第254図	30	土坑15	土師器	坏		器高 0.8 底径4.5	外面体部回転ナデ。底部静止系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	内外面とも橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書。文字不明。
第254図	31	土坑15	土師器	坏		器高 1.1 底径4.7	外面体部ヨコナデ。底部静止系切り。内面ヨコナデ後仕上げナデ。	密	やや不良	外面浅黄橙色。内面橙色	体部外面化粧土施す。体部外面墨書。文字不明。
第254図	32	土坑15	土師器	坏		口径10.8 器高3.15 底径4.25	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	内外面とも浅黄橙～橙色	体部外面化粧土施す。
第254図	33	土坑15	土師器	坏		口径10.8 器高3.4 底径4.0	外面風化著しい。底部回転系切り。内面風化著しい。	やや粗(1mm大赤色粒含む)	やや不良	内外面とも浅黄橙色	体部内外面化粧土施す。
第254図	34	土坑15	土師器	坏		口径12.2 器高3.1 底径 4.4	外面体部回転ナデ。底部系切り痕。内面体部回転ナデ。底部ヨコナデ。	密	やや不良	内外面とも浅黄橙～橙色	体部外面化粧土施す。
第254図	35	土坑15	土師器	坏		口径11.6 器高3.4 底径3.9	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	外面浅黄橙～橙色。内面黄橙色	体部外面化粧土施す。底部外面墨書。文字不明「率」か。
第254図	36	土坑15	土師器	坏		口径 12.1 器高3.45 底径4.7	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	不良	内外面とも浅黄橙～黄褐色	体部外面化粧土施す。
第256図	37	段状遺構1盛土上層	土師器	皿		口径 11.0 器高 2.1	内外面とも回転ナデ。	密	良好	内外面とも浅黄褐色	
第256図	38	段状遺構1盛土中	土師器	皿		器高 1.0 底径5.0	外面底部回転系切り後板目。内面調整不明。	密	やや不良	内外面とも橙色	
第256図	39	段状遺構1盛土中	備前焼	播鉢		口径 32.6 器高 4.1	内外面ヨコナデ。	密	良好	外面橙～にぶい橙色。内面橙色。	
第256図	40	段状遺構1表土中	備前焼	壺		口径 22.4 器高 7.8	内外面ヨコナデ。	密	良好	内外面ともにぶい赤褐色	
第256図	41	段状遺構1盛土中	青磁	碗		口径 14.0 器高 3.5	外面口縁端部付近形骸化した波状の雷文帯をもつ。	密	良好	灰白色	内外面暑く施釉。青磁碗C-類
第256図	42	段状遺構2盛土最下層	須恵器	甕		器高 3.0	外面格子叩き。内面ハゲ目。	密	良好	内外面とも灰色	
第257図	43	段状遺構5埋土中	土師器	坏		器高 1.0 底径 7.0	外面体部調整不明。底部回転系切り。内面ナデか。	密	良好	内外面とも浅黄褐色	
第257図	44	段状遺構6埋土中	土師器	坏		口径 12.4 器高 3.4	内外面とも回転ナデ。	密	良好	外面にぶい黄褐色。内面にぶい橙色。	外面スス付着。
第264図	45	溝3	備前焼	播鉢		器高 5.9	外面口縁部2条凹線。体部ヨコナデ。内面ヨコナデ。	密	良好	内外面とも暗赤褐色	VA期

表35 門前鎮守山城跡出土遺物観察表(3)

挿図	遺物番号	遺構・地区・層位名	種類	器種	材質	法量 (cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
第266図	46	D 3 整地層	備前焼	甕		器高 15.0 底径 26.9	外面ハケ状工具による上方向ナデ。内面ナデ。	密	良好	内外面とも ぶい赤褐色	
第266図	47	D 3 整地層	土師器	皿		口径11.3 器高2.35 底径5.5	外面体部上半ヨコナデ。下半-底部ケズリ後ナデ。内面体部ナデ。底部ヨコナデ。	密	良好	内外面とも ぶい黄橙色	体部内面工具痕あり。内外面指押え痕あり。
第266図	48	D 3 整地層	土師器	皿		口径 11.8 器高 2.3 底径 6.8	外面上半ヨコナデ。下半-底部ケズリ後ナデ。内面体部ナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	内外面指押え痕あり
第268図	49	溝 1 最下層	瀬戸	天目茶碗		口径 12.0 器高 5.6	轆轤整形。	密	良好	灰白色	内外面鉄釉。
第271図	50	石組遺構 1	土師器	鍋		口径 30.4 器高 3.7	外面ナデ。屈曲部指押さえ。内面ヨコナデ。	密	良好	内外面とも ぶい黄橙色	
第271図	51	石組遺構 1	土師器	坏		器高 1.4 底径 5.2	外面体部斜方向ハケ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	良好	内外面とも ぶい黄橙色	外面黒斑あり。
第271図	52	石組遺構 1	備前焼	播鉢		口径 24.0 器高 5.2	外面回転ナデ。内面回転ナデ後粗い播目。	密	良好	外面灰色。 内面オリーブ 灰色	B - 2 類
第271図	53	石組遺構 1	須恵器	高台付盤		器高 2.1 底径 12.0	内外面とも回転ナデ。	密	良好	内外面とも灰 色	
第272図	54	石組遺構 2	土師器	皿		口径 12.6 器高 2.1 底径 5.0	外面口縁部ヨコナデ。体部下半タテハケ後ナデ。内面ヨコナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	
第272図	55	石組遺構 2	土師器	皿		口径 12.4 器高 2.1 底径 5.4	外面口縁部ヨコナデ。体部下半手捏ね成形。内面ヨコナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	
第272図	56	石組遺構 2	土師器	皿		口径 12.6 器高 2.4 底径 5.0	外面口縁部ヨコナデ。体部下半手捏ね成形。内面ヨコナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	
第272図	57	石組遺構 2	土師器	小皿		口径8.2 器高1.8 底径1.2	外面口縁部ヨコナデ。体部下半手捏ね成形。内面ヨコナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	口唇部油煙付着。
第273図	S3	石組遺構 2	五輪塔	地輪		最大長27.1 最大幅28.8 最大厚18.8	方形に加工した五輪塔地輪。加工痕は明瞭ではない。				
第273図	S4	石組遺構 2	五輪塔	地輪		最大長27.1 最大幅27.4 最大厚22.8	方形に加工した五輪塔地輪。側面に幅1.8cm程度のノミ痕が残る。				
第273図	S5	石組遺構 2	五輪塔	地輪		最大長28.2 最大幅27.9 最大厚13.5	中央が掘り窪められた五輪塔地輪。幅1-2cm程度のノミ痕が明瞭に残る。				
第276図	S6	石敷き状遺構	砥石		細粒花崗岩	最大長 3.8 最大幅4.5 最大厚 1.25	裏面、一方端欠損。主な砥面は1面。擦痕明瞭に残る。				
第279図	58	P 8 埋土中	備前焼	甕		口径 17.0 器高 4.0	外面口縁部ナデ後1奈洗線。内面ヨコナデ。	密	良好	内外面とも ぶい褐色	期?
第280図	59	造成土中 C 1	土師器	坏		口径13.0 器高3.6 底径6.7	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	不良	内外面とも橙 色	内面鉄器付着痕。
第280図	60	造成土中 C 2	土師器	坏		器高3.6 底径 5.5	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデ。	密	やや不良	内外面とも橙 色	系切り痕体部まで及ぶ。
第280図	61	造成土中 C 1 トレンヂ	須恵器	高台坏		器高 2.0 底径 7.0	内外面とも回転ナデ。	密	良好	内外面とも灰 色	
第281図	62	遺構外 B 4	土師器	坏		器高 2.4 底径 6.7	外面回転ナデ。底部ヘラ切り後ナデ。内面回転ナデ。	密	良好	内外面とも ぶい黄橙色	
第281図	63	遺構外 C 2	土師器	坏		器高 1.8 底径6.2	外面風化著しい。回転ナデか。底部回転系切り。内面風化著しい。回転ナデか。	密	やや不良	内外面とも浅黄橙色	
第281図	64	遺構外石垣裏込め土中	土師器	坏		口径 12.4 器高 3.6	内外面回転ナデ。	密	やや不良	内外面とも浅黄橙色	
第281図	65	C 2 表土中	土師器	高台坏		器高 2.9 底径 5.7	外面体部回転ナデ。底部回転系切り。内面回転ナデか。	やや粗(1mm以下の砂粒含む)	良好	内外面とも橙 色	
第281図	66	遺構外 C 2 表土中	青磁	高台付碗		器高 3.5 底径 6.6	内外面とも厚いオリーブ色の施釉。底部外面無釉。	密	良好	灰オリーブ	
第281図	67	遺構外 C 4	瀬戸	天目茶碗		口径 10.2 器高 4.2	内外面とも回転ナデ。	密	良好	灰オリーブ	内外面鉄釉。

表36 門前鎮守山城跡出土遺物観察表(4)

挿図	遺物番号	遺構・地区・層位名	種類	器種	材質	法量 (cm)	手法・形態上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
第281図	68	遺構外 C 3 表土	瀬戸	天目茶碗		口径 10.4 器高 5.5	内外面とも回転ナデ。外面体部施釉。底部付近露胎。内面施釉。	密	良好	灰オリーブ	内外面鉄釉。
第281図	69	遺構外 B 3 表土中	瀬戸	天目茶碗		口径 10.0 器高 5.0	内外面とも回転ナデ。外面体部上半施釉。下半露胎。内面施釉。	密	良好	灰オリーブ	内外面鉄釉。
第281図	70	遺構外 C 1	瓦質土器	短頸壺		口径9.2 器高 17.1	外面ナデ。内面指押さえ。	密	良好	外面暗灰色。内面灰色	
第281図	71	遺構外 C 2	陶器	鉢		口径 22.7 器高 5.0	外面回転ナデ。2条凹線間に波状凹線。内面ナデ。	密	良好	内外面ともに ぶい橙色	
第281図	M45	遺構外 B 2	古銭	寛永通寶		径2.40 厚さ0.12					期
第282図	72	造成土下包 含層 B 3	土師器	脚付埴		口径 16.0 器高9.6 底径 9.9	外面口縁部ヨコナデ。体部左方向ケズリ。脚部ケズリ後ナデ。内面体部丁寧なナデ。脚部ナデ。	密(1mm以下砂粒含む)	良好	内外面とも浅黄橙色	脚部指頭圧痕あり。
第282図	73	造成土下包 含層 C 2	土師器	高台坏		器高 2.6 底径 9.3	内外面とも回転ナデ。	やや粗(1mm大の砂粒含む)	良好	内外面ともに ぶい橙色	底部内面スス付着。
第282図	74	造成土下包 含層 C 2	土師器	坏		口径 12.4 器高4.2 底径 7.4	外面風化著しい。ナデか。内面体部回転ナデ。底部ナデ。	密(1mm以下砂粒含む)	やや不良	内外面とも橙 ~にぶい橙色	内面底部スス付着。
第282図	75	造成土下包 含層 C 2	土師器	坏		器高 2.4 底径 6.4	外面体部回転ナデ。底部糸切りか。内面回転ナデ。	密	良好	内外面とも橙 色	
第282図	76	造成土下包 含層 B 3 黒褐色土	土師器	坏		器高 2.1 底径 6.5	外面体部ナデ。底部回転糸切り。内面回転ナデ。	密	良好	内外面ともに ぶい黄橙色	
第282図	77	造成土下包 含層 C 2	土師器	坏		器高 1.6 底径 6.0	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面ナデ。	密	良好	内外面とも浅黄橙色	
第282図	78	造成土下包 含層 B 2	土師器	坏		器高 1.8 底径 6.0	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面ナデ。	密	良好	内外面ともに ぶい橙色	
第282図	79	造成土下包 含層 B 3 トレンチ	土師器	坏		器高 1.4 底径 7.3	外面体部ナデ。底部回転糸切り。内面回転ナデ。	密	良好	内外面ともに ぶい黄橙色	
第282図	80	造成土下包 含層 B 2	土師器	坏		器高 3.0 底径 7.4	外面体部ナデ。底部静止糸切り。内面ナデ。	密	良好	内外面とも橙 色	
第282図	81	造成土下包 含層 B 2	土師器	皿		器高 0.9 底径 4.3	内外面風化著しい。底部外面回転糸切り。	密	良好	内外面ともに ぶい黄橙色	
第282図	82	造成土下包 含層 B 2	土師器	坏		器高 2.4 底径 5.7	外面体部回転ナデ。底部ケズリ。内面丁寧なナデ。	密	やや不良	外面にぶい黄褐色。内面明赤褐色	
第282図	83	造成土下包 含層 B 2	土師器	坏		口径 12.4 器高3.5 底径4.0	外面体部回転ナデ。底部回転糸切り。内面体部回転ナデ。底部ヨコナデ。	密	良好	内外面ともに ぶい橙色	
第282図	84	造成土下包 含層 B 2	土師器	鍋		器高 7.3	外面ナデ。内面ヨコハケ。	密	良好	外面にぶい黄橙色。内面褐灰色	外面スス付着。
第282図	85	造成土下包 含層 C 2	白磁	皿		器高 1.2 底径 4.0	外面体部施釉。底部露胎。内面暗文。施釉。	密	良好	灰白色	白磁皿 類
第282図	86	造成土下包 含層 B 2	須恵器	甗		器高 10.7	外面3条凹線により削り出された鈍い突帯間に7条原体の波状文。内面回転ナデ。	密	良好	内外面とも黄灰色	
第282図	87	造成土下包 含層 B 2	須恵器	甗		口径 38.6 器高 8.8	外面口縁部ヨコナデ。体部格子叩き。内面口縁部ヨコナデ。体部粗いハケ。	密	良好	外面灰色。内面灰黄~暗赤褐色	
第283図	S7	造成土下包 含層 C 2	石器	打製石斧	安山岩	最大長21.1 最大幅9.0 最大厚4.1 重量932g	刃部撥形に広がる。細めで厚味のある打製石斧。				
第283図	S8	造成土下包 含層 C 2	石器	打製石斧	無斑晶安山岩	最大長14.0 最大幅5.9 最大厚4.1 重量504g	小形で厚味のある打製石斧。裏面は平坦だが、表面は縁辺部に調整が入るのみで丸みを持つ。				

なお、鉄関連遺物観察表は、第6章第5節参照。